小田原史談

第　163　号
発行所　小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

占領下小田原の裏話

尾崎　正（談）

米海兵隊員と英海兵隊員とピストルの撃ち合い

戦後、私のところの旅館（小伊勢屋）は、イギリス艦隊に接収されて……。これは否応なしなんですよ。

戦争中、この業界でずっと営業を続けたのは、神奈川県下では、私のとこと、逗子にある心静亭、県下で二軒きりが、旅館の看板を外したことがなかったのです。

箱根の旅館は、全部、軍の施設として使われたり、疎開児童を受け入れたり、当時、枢軸国（友好国）のドイツ軍人の寮となったりして、営業しているのは一軒もなかったですよ。

ところが、進駐車がやって来て、看板はとりあげられちゃったのです。電話も切断されちゃって……。

それで、イギリス艦隊が入って来て、初めて看板がかけられるようになって。

……小伊勢屋は、電話が百十番でしょう、昔は十番だったです。十番の電話は、おぢいさん（尾崎壮三。小伊勢屋第十五代目）が郡会議員に出たときに、郡役所に電話がないというんで、郡役所に十番を持って行って、自分とこに百十番を持って来た。その百十番を警察にやって、今度その代りの電話がロクでもない番号が来ちゃって……。

郡役所　郡制が施行されたのは、明治二十四年（一八九一）四月。町村の上に位する地方自治団体で、郡長は官吏、郡会議員は公選で、郡の仕事を郡会で決議して行く制度となった。郡制は大正十二年（一九二三）三月、廃止された。足柄下郡役所は、現在の県合同庁舎前の国道を隔てた小田原東映劇場辺（小田原市本町二～七）に置かれていた。

指定の宿泊所となった小伊勢屋に

特集　戦後五十年続編

は、イギリス艦隊の海兵隊が、常時三十人ぐらいが二日おきに交替で、横須賀から電車に乗ってやって来るんです。休養にやって来る訳です。

宮小路の春日は、戦争中は軍需工場の従業員の寮となっていましたが、進駐軍がやって来てからは、アメリカ艦隊海兵隊の休養施設として接収されました。

その頃、いろいろな事がありましたねえ……。

うちに泊っているイギリス兵が、春日に泊っているアメリカ兵との間で、ピストルの撃ち合いがありました。この事を知っている人は、もういないかも知れません。春日の譲ちゃん（松尾譲二氏。料亭春日の主人）が生きていれば知っているんだけど……。関係者は皆んな死んでしまっていない。

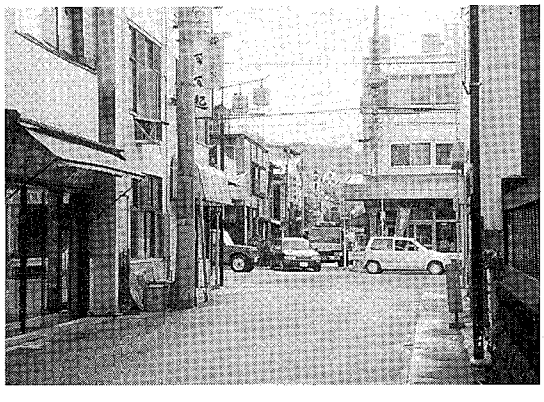
撃ち合いした時期ですが、私が復員して来たのは八月二十一日すぎ、それから間もなくたっての事ですから、九月になってのことでしょう。うちに泊っていたイギリス兵が血相変えて出て行ったからねぇ。でも、彼等は決して跣で行かないのね。ちゃんと身仕度をして靴を履いて出て行った。

まるで、非常呼集みたいに出て行ったからねぇ。何事が起きたかと思って、私も後を追って行った訳。

すると、柏又の前の通りで、ポンポンと音がして。また、違った方向から撃っていると思ったら松原神社の方からで……。対陣してやった訳です。

初めは、本当に人間を殺してしまうのかと、ビックリしたが、そうではないのねぇ。両方が威嚇射撃をしていて……。

イギリス兵は柏又の通りの方から、アメリカ兵は松原神社の方から。国道を隔てて撃ち合って……。それも真正面から狙うのでなく、柏又の横にいて、撃ったり隠れたりして、向うは向うで神社に入ったり、出たりして撃っているんだから当りっこはないんで。ほんとに相手を殺す積り



英兵と米兵と打ちあった辺り
右手前は松原神社

で、やってないから、我々は、後ろの方から見ていて危なくないんだから……。

勿論、負傷者も出なかったです。そのうち、本隊が駈け付けて、両方をやっと取り押さえて……。

そのときの責任者は、アメリカの方は知りませんよ。名前をよく覚えていないけど、イギリスの方は、少佐だった。この人は、物凄くしっかりした人でねえ、この人が、酒匂にいるアメリカ進駐軍の本隊に応援を求め、それで、出動した経緯がある。

事の発端は、食料の配給が、アメリカの艦隊とイギリスの艦隊と非常に差があって、イギリスの方のビールの配給が少なかったからです。何処でどうして分かったか知らんけど、ともかく、向うは、あり餘る程配給して、こっちは飲むのに足りない。こんな不公平な事があるか、ということになってしまって……。

イギリス海兵隊員への食料の補給は、イギリス艦隊からでなく、酒匂の印刷局にいるアメリカ軍からしたんです。だから、どうしたって、自分の方は余計にとって、こっちは宛行扶持になったんです。そこで、それはおかしいと、イギリス兵が怒り出したんです。

多少事前に両方の間で交渉があったかどうか知りませんが、ともかく撃ち合いを始めたのです。

この事は、最初、私等なんの事だか判らなかったですよ。終ってから、イギリスの少佐から、話を聞いて初めて知ったのです。「不公平な配給するから、兵隊がああやって怒るんだ」という少佐は、日本語がペラペラなんです。偉い男だネ。「何処で日本語を勉強されたんですか」と、聞いたら、ちゃんと前もってマスターしたという答だけでしたが、ドイツ語、フランス語も出来ると云うんだね。

イギリス海兵隊の責任者は二人いまして、一週間交替です。だから、月のうち二、三回はやって来ました。もう一人の責任者は、日本語が全然出来なかったので、その人が来ると安心していられましたよねえ。

ともかく、そのイギリスの海軍少佐は、ピストルの撃ち合いの訳が分かって、交渉に入り、物資を公平に配給するという事になったんです。

それ迄は、半分ぐらいしかこなかったんじゃないですか。それから急に増えちゃってねぇ。休養に来るのが三十人といっても、三十人こない時もある。しかし、品物だけは、三十人分来る訳、どうしてもダブついちまう。ダブついた分は、我われが頂く、随分助かったですよ、食料だけは。家族も食べましたよ。私は寮長ですからね、給料も貰って。月に二十円でしたか……。

初めのうちは、缶詰が多かった。あとになると、生肉を塊で持って来ました。ベーコンは初めからずっとありましたねぇ。缶詰など、彼等はあまり食べないね。それで、アメリカ兵は道路の真中に缶詰をガサガサこぼしてね……。それを日本の子供たちが、拾うんです。

一番豊富なのは砂糖でしたよ。何kgというんですか南京袋のでかいやつで、とても一人で担げやしない。それをトラックで運んでくる。それを使うんだが余ってしまう。困ったことに、彼等は、それを売る訳でしょう。それから、彼等は、船からやって来るとき、ズボンやシャツなど下に余計に着てくるんです。それを売るんですよ。これはいくら、これはいくらと売ってる訳なんです。

それで、私は、そんな事をしては困ると、少佐に話を持ちかけたです。何んとか、横流しするのは、将来小伊勢屋の暖簾にかかわることだし、厳重に取り締って貰えないかと。

ところが、少佐曰く。

「彼等はねえ、何んの楽しみがないから、ああやって着込んでくるんだ。小遣いがないから、それを小遣いにしてんだからネ。ある程度は面倒をみないとね、不平不満が出るから。まあ、目をつぶれる所は、目をつぶってくれよ」

と云う訳でして……。

どんどん買いにくるんですよ。何処からどう仕入れに来るんだか分かりません。ただ、砂糖だけは、お菓子屋さんなんかが買いに来ました。私が知っている菓子屋さんがいましたから。どのくらいの値段で売ったか分かりませんが、ともかくヤミとして市中に流れたのです。

こんな塩梅でしたから、私等は、戦後、食料だけは不自由しなかった。

電気もそうでした。私の家の前にでっかいトランスを上げて、家だけが電気が煌々として……。トランスを上げて電力が余ってるでしょう。勿体ないから私は、国道に街灯をつけてもらいました。他所は真っ暗だったけど。当時珍しい事で、たしか朝日新聞でした、この事が報道されまして。

冬になれば、電気ストーブをガンガンやってまして、火事になりはしないかと心配するほどで、木造の家は火に弱いなどお構いなく。あるいは、知らなかったかも知れませんが……。イギリスの石造りの建物の暖炉で火を焚く習慣をそのまゝ持ち込んだようです。ですから火については格別の心遣いをしましたよ。

困ったことには、家を汚されて困っちゃいました。靴を脱がずに土足のまゝ部屋にあがるものですから。もっとも、慣れるに従って脱ぐようになりましたが。それに、夜具の掻巻を着て部屋の中を歩き廻るには弱りましたよ。彼等が使った日本の布団など全部駄目になっちゃって、もう一つも使えるものは無かった。初めのうちは補償するという話だったが、全く補償されなかったです。

（聞き手　岡部　忠夫）

遥かなる覇王城（2）

――終戦から50年 中国戦線の回想――

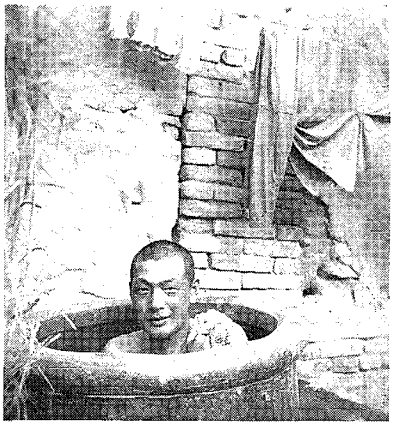
星野幸一

五　幹部候補生教育

（承前）

昭和十七年二月一日から一ケ月間長辛店の廠舎（京漢線北京より二駅手前の南郊）をベースキャンプとして全候補生参加による野営演習がスタートした。対ソ戦術に重点を置き卒業演習のスケジュールを消化すると、永定河畔（蘆溝橋より三〇〇m上流の右岸）日支事変勃発の地一文字山記念塔前の広場に集合、松浦校長の訓示、生徒隊長揚田大佐の講評があった。

そして二泊三日の泊行軍による北京見物である。高雅な風格のある老舗が並ぶ王府井から東安市場に入ると、迷路のように多種多様の店が並び、北海公園の屋台では、サンザシの赤い実を十個ほど串に刺し、表面に水アメをからめた、甘酸っぱい糖胡蘆を賣っていた。池畔に佇めば、万寿山を背に木々の緑に浮ぶ白塔は、美しく、北京の空に映える紫禁城のシルエットは素晴らしい。



カメ風呂にて戦塵を流す（筆者）

この見物も、軍指令部の命令で北京市街の目抜き通りを行進して「皇軍の威容」を市民に誇示するデモンストレーションであった。

紫禁城は、明・清の時代五〇〇年にわたる皇居で、故宮とも云われ、中国を支配した権力者が財力の限りを尽くしてつくり上げた居城であり、皇帝の調度やコレクションは素晴らしい。中でも長さ十七m、幅三・七m、厚さ一・七m、重さ二五〇tの大理石の一枚岩に彫った六頭竜の御路には聊か圧倒された。

昭和十七年三月三十日付で曹長、同日付で見習士官（将校勤務）に任官、同校を卒業した。四月三日には原隊に復帰して第三MG中隊付将校となり、士官見習の修行が始まったのである。中隊長は樫村徳四郎中尉（茨城県那珂湊市出身・故人）であった。

六　汲県警備隊

第三MG中隊の駐屯地は、第三大隊本部のある汲県であった。「衛輝」とも呼ばれ新郷から北へ京漢線の次の駅である。県庁所在地であるが、新郷に比べると田舎で城壁も小さく静かな町であった。第二大隊と警備地区を交代したので、恒例により知事主催の将校を対象とした歓迎のレセプションが公邸で開かれた。

宴席で県知事は「皆さんと私たちは東洋人で同じ黄色民族であります。共通の文化基盤を持っているので、相互理解を深め仲良くやって行きましょう」という主旨の挨拶をされたのを覚えている。私は、このような中国の宴席には何回か出席したが、知事の私邸に招かれたのは始めてであった。

華北の典型的な四合院の棟は、月亮門を潜ると中庭を囲み独特の風情があった。木槿の生け垣には、白や淡い紫色の花が咲き誇っていた。飲茶（ジャスミンティー）の席で御子息を紹介されたが、民族服の長衣を羽織った容姿は端正であった。

彼は、北京大学の学生で食後、私を自室へ招じ入れ象形文字の話をしてくれた。物の形を象った絵文字は美しく、片言混りの私の中国語もどうにか通じたのである。

七　補充兵教育

汲県への移駐が一段落すると、聯隊本部より補充兵教育の教官に任命された。第一、第二、第三MG中隊のbiA要員をまとめての教育で、助教は愛甲郡出身の中村軍曹、助手は三浦郡出身の吉田兵長、富士吉田出身の岸本兵長であった。場所は、住み慣れた新郷の新兵舎。中隊を離れ独立した教育隊の責任者となったのである。

教科書は、『歩兵操典』『作戦要務令第一部』、『作戦要務令第二部』、『射撃教範』、『剣術教範』、『体操教範』、『馬事提要』、『軍隊内務令』、『陸軍礼式令』、『陸軍刑法』、『陸軍懲罰令』の十一冊であった。四ケ月の教育計画作りでは一苦労したが、初めての教官を務め、教育技術のノウハウを身に着けたのである。

毎週月曜日の朝一時間は精神訓話をすることになっていた。テーマは『軍人勅諭』と『戦陣訓』、佐賀鍋島藩の「葉隠」（武士の修養書）もよく利用した。「誠心」を以て実行せよと示された勅諭の五箇條は左記の通りであった。

一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし

一、軍人は礼儀を正しくすべし

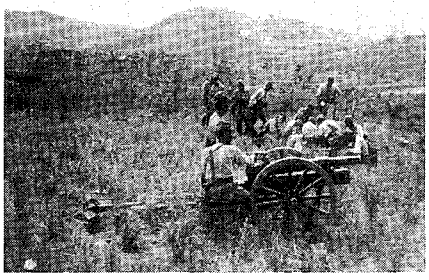
一、軍人は武勇を尚ぶべし

一、軍人は信義を重んずべし
一、軍人は質素を旨とすべし

なお、『戦陣訓』「名を惜しむ」の項では「恥を知る者は強し、常に郷党家門の面目を思い、愈々奮励して其の期待に答うべし。生きて虜囚の辱めを受けず死して罪禍の汚名を残す勿れ」等軍人勅諭を体して実行するための具体的準拠を示したのである。

学科と並行して実地教育も一ケ月を過ぎると、砲各部の名称や分解組立、手入法、射撃の基礎動作も終り、兵舎から郊外へ出て戦闘訓練が始まった。実戦に対応する地形地物の利用である。土饅頭の墓が点在する畑や新郷山という小さな丘は格好の演習場であった。

鉄帽を被り擬装して日本人小学校の方へも出かけたのである。良くグランド近くで休憩したが、補充兵は世帯持ちが多く、子供の体操や遊戯を見ているとノスタルジックになったようだ。私がグランドに上って言葉をかけたのは、真っ白な体操服姿の若い女の先生であった。



戦闘射撃に於ける聯隊砲（四一式改造山砲）の陣地

こんなことが何回かあって、ある土曜日の午後、将校室でひと休みしていると、衛兵所より伝令が「御婦人の方が面会です」と伝えて来た。私は女性のなど思いも寄らぬことで間違いではないかと疑ったのである」。

早速衛兵所に行ってみると、清楚な和服姿の小学校の先生であった。将校官舎に案内し、土産の生菓子をお茶請けに教育のことや取り留めもない話をしただけだが、時の経つのも忘れる程で、二十代前半の二人は、互いに不思議なほど気になる存在であった。帰りしなに来週の日曜日に食事をご馳走したいとの招待を受けた。

私は風月堂の菓子折を手に教員宿舎を訪ねたのである。手作りの食事にはほのぼのとした温もりがあった。先生はたしか奈良女高師出身で、この町の日本人小学校に赴任した偶然性から、私も知友となり、束の間のデートを楽しんだのである。

休日には同期の斎藤嘉輔見習士官（横浜出身・傷痍軍人・眼科医・故人）と良く外出した。外地は、内地より未だ思想統制が緩やかであった。休日の兵舎では、手巻きの蓄音機で、流行歌や軍国歌謡を聞いていたが、町の喫茶店やナイトクラブへ行くと、電蓄で「敵性」のラテン音楽やアルゼンチンタンゴが流れ、映画館では、ゲィリークーパー主演の「モロッコ」やマレーネデイトリッヒ主演の「嘆きの天使」等を映していた。

ある夜、クラブ「美松」のボックスで何気なくエントラントの方を見ると長身のスマートな青年将校が一人颯爽と入ってきた。同郷の伊勢万文具店の鈴木千之助君であった。彼は中学校（五年制）の一期後輩だが四年生で陸軍航空士官学校に合格したベテランのパイロットであり中尉であった。二人は敬礼もそこそこに手を取り合って異郷での邂逅に熱い感動を覚えたのである。

千ちゃんは、私を気遣ってか長話せず、片隅のボックスでコーヒーを啜り煙草を燻らせていた。帰りしなに明朝台湾へ発つと云ったので、見送りを約して別れたが、今日書にフィリピンから飛んできた千ちゃんがどんな重要な任務を帯びてきたものか知る由もない。千ちゃんは、日本ホテルに投宿したが、翌朝八時に飛行場へ行くと、搭乗する直前で、機内からフィリッピン煙草のマーキュリイ（MERCURY）二十個入一箱を取り出し置いて行った。別れ際に「幸ちゃん、俺は旅鳥だよ」と云った言葉が忘れられない。二人は手を固く握りあった。

千ちゃんは、渡り鳥のように翼をバンクしながら新郷の空を飛び立って行ったが思いなしか映画のラストシーンのような別離であった。

千ちゃんは、昭和十九年八月の重慶爆撃行で九九式双発軽爆撃機三機編隊の爆撃隊長として搭乗、揚子江をさかのぼり、四十五度の急降下爆撃により在地機多数を炎上させ、その直後、敵戦闘機に狙われ、空中戦となり右エンジン部に被弾火を噴き始めたので基地への帰還を断念、敵の格納庫を目掛け体当り爆破、乗員八名（爆撃戦隊長も同乗）共に名誉の戦死を遂げたのである。

（続）

［参考］

「金鵄勲章年金令」
明治二十年十月四日公布

第一條　金鵄勲章を賜る者には功級に応じ終身年金を加賜す

第二條　功一級　九〇〇円
功二級　六五〇円
功三級　四〇〇円
功四級　二一〇円
功五級　一四〇円
功六級　九〇円
功七級　六五円

第三條　本令の年金受給者死亡したるときはなお一年間遺族に年金を賜う。

「その頃の物価」

はがき	二銭
白米10kg	三円三十六銭
牛乳一合	十二銭
新聞購読料（一ケ月）	一円二十七銭
ビール（一本）	八十二銭
靴下（綿）	四十六銭

副官の戦死（2）

ソ連軍の圧倒的な火力の許

佐々木　勝衛

入営する以前に新聞やラジオ放送で、戦地の兵隊が又航空兵が気を失いかけて、今はの際に、母の顔が浮んで生気に戻り、一命が助かったとか、母親の愛情の深さを称える話しなどを見たり聞いたりして居ったので、若しやと思って念じて見たが一向にそれらしいものが現われてこない。

母子の愛情の絆が薄かったので俺はだめなのかと一瞬思う。思わず眼を明けて様子を見る。二〇センチ位の間隔で流し撃ちするマンドリンの弾の走るのが未だ続いて居る。

いつ当たるのだろうか息を凝して待つ。

それとも左大腿部に当たった傷から血が流れ出てソ連兵がそれを見て副官や丸山軍曹に向かって集中して居るのだろうか。汚れた古いズボンなので生々しい血がはっきり分らないのではなかろうか、又流れる程に出血して居るのだらうか、あれやこれやと、瞬時の間に次々に頭の中を駆け巡る。数分間なのか数十分位なのか未だに分らない。

やがて戦車は又、エンジンを吹かして、ガタガタ音を立て動き出した。早くこの儘向こうへ行ってくれ、早く早く。急に身が縮む思いと恐怖の感が出て来た。それから数分、うるさい音が遠ざかる。高台の繁みの方向には相変わらず戦車砲を打込んで居る音が響いて居る。

もうここには来ないだろうと思い、肘で擦り上り副官の左靴を振り動かしながら低い声で「副官殿。副官殿。副官殿」と呼んでも返事がない。身体の動きもない。左の尻のズボンに小さな穴が空いて居り細く血が流れて居る。一声も発せず呻きもなく、他にどこに当たったのだらうか。

未だ左腰から先は痛みも何も感じない。ただ重い丸太でも付いているような感じである。

雑嚢を引き寄せ、名前は忘れたが黄色い殺菌圧縮ガーゼの、包を破り出し、腹に巻いた古い敷布を解き引裂き、全然感覚のない伸び切った儘の脚のズボンを横になった儘ずり下げ、傷はと見ると血でベッタリ赤黒く何処に当たって居るのか解らない。袴下も血でベッタリして居る。手で地糊をこする様に拭いて見ると、以外に小さい生の肉が見えてそこから血が流れ出て居る。弾は脚の中か、穴の反対側の内側を見ると、最初に見付けた穴よりも小さい穴がある。撃たれた姿勢から、この小さい方から弾が入って貫通したのである。良く分らないが貫通の方が後々良いのであろうと、少し安心したが骨等に疵があるのではと不安もあったが、敷布の仮繃帯にて両傷口のガーゼがずれ落ちない様にと無感覚の脚にきつくグルグル巻き付けた。

遠くで未だ戦車の動く音が聞え、時々斜面の繁みの方向に戦車砲を撃ち込んで居る。立ち上って見ようと思ったが、立ち上れない。撃たれて血を流した所にこの儘居るのが嫌な気がしたので、現場より七、八メートル両肘で擦り上りながら左前方へと、移動する。

丸山軍曹の呻く声が聞える。雑草のため姿が見通せない。戦車より降りたソ連軍の歩兵はまだ追撃して居るのだろうか。味方の方はどうなって居るのだらうか、戦死者負傷者は……。

また戦車が近づいて来る音が聞える。しまった。動いたのが発見されたのであろうか、トラクターのようなエンジンの音、キャタピラの音が、益々近づいて来る。そして一〇メートル位の距離だろうか停止した。

ソ連兵の声が聞える。二、三人戦車から降りたのだろう。バンバンバンとマンドリンを突然撃ち出した。と同時に丸山軍曹の呻く声がピタリと止まった。

又ソ連兵同志の話し声がする。後で判ったのだが、時計、万年筆等漁って居ったのだ。

やがて又戦車のエンジンの唸りが一きわ高く鳴り出した。

今度は自分の番である。又かと思ったがどうする事も出来ない、鉄砲も手榴弾も鉄帽も皆撃たれた場所に置いて来てる。上眼で見ると又ゆっくりと近寄って来る、動かずに居ったら良かったのかと思う暇もなく砲身が眼前に飛び込んで来る。引き殺す気配だ、今度こそ終わりか、将に絶体絶命、息が詰まる。ノロノロと三〇センチ以上もあるキャタピラが頭の上からのしかかる、瞬間危機一髪伏せた身体を右横腹を下に開いた。眼前スレスレにキャタピラと鉄の車輪が通る。呼吸が完全に止る。何秒間か長い瞬間であった。眼前から消えても再び停車して戦車の上から或は降り立って撃って来るのではないかと、又伏せて息を凝して待つ。

しかし今度こそ引き殺したと思ったのか止らずに動いて居る様子、早く遠くへ行って呉れ、もうたまらん、早く早く。恐る恐る後方を見ると一〇メートル程先に行って右方向にカーブを切って雑草の陰の中に入って進んでる。音だけは未だ間近かに聞える。

もう精根も尽き果てた、全身の節々が麻痺したよう

な、そして全身に鈍痛がして来た。もうこれ以上我慢出来ない。

又引き返して来るのだろうか。もう今度こそ終わりだろう。どうにでもなれと自棄になる。上向きになり、手足を思い切り伸ばし大の字となった。

大陸の澄み切った青空、雲一つない青い空、太陽は真上に来ておった。何時になったのであろうか、短時間の出来事と思っておったが案外時間が経ったのであろうか。

穆稜の裏山陣地のタコ壺を出た儘開戦となり、激戦の後、撤退撤退の連続、一日としてゆっくり休養もしてないので、身体の疲れとそれに緊張の連続、精神的にも限度に来たのであろう。心身共に力が抜け眠くなって来た。もう諦めた後なので大きく深呼吸して目を閉じた。

どれ位経ったのか、目が開いた。太陽は西に傾き、先程まで戦車の音、砲撃の音、そしてあのマンドリンの音も何一つ聞こえない。静かで気持ち悪い位である。

雑草の影も長い。夕方だろうが、何時頃なのだろうか。いやそれより助かったのだ。生きているのだ。あの後どうなったのであろう。今度こそ完全に殺したと思って三度目は来なかったのであろう。それにしても汚れた兵隊の服装なので時計、万年筆などの物盗りにも来なかったのであろう。

さてこれからどうしよう。どうしたらよいのだろうか。間もなく暗くなるだろうから灌木の繁みの中迄行かなくてはと、丸山軍曹の場所へと最初に這って近寄ると、仰向けになって白眼を開いた儘、口からは泡のような状態の血が首から胸まで流れ出て居った。

筆者近影

瞼を閉じさす。

何か形身をと革鞄を開けて見ると札が丸めてゴムバンドで留めてある、何百円か何千円か、部隊の金であろう。その金と白の新品の軍手一足をポケットに入れる。万年筆や時計等はやっぱり何も無かった。もう満洲の大陸には草花の時期も過ぎ、手向ける花一つない。蓮のような野草数本手折って、胸の上に供へ合掌する。

副官の場所は、一緒におったので、探さずとも簡単にわかった。副官は一声も発していないので不思議に思い、身体を仰向けにして見たら眼は閉じた儘、苦しんだ形相もなく温和な死顔をしておった。

弾の当たった場所を探して居ると双眼鏡のケースに小さい穴があり、持ち上げて見ると、丁度心臓と思われる所の軍服に小さな穴があり血は出てないが、この弾で即死とわかった。

形身として軍刀と双眼鏡を持ち、又野草を手折って胸の上にお供して合掌する。

自分の小銃はと見ると、戦車に敷かれたが、土の上なので、銃把の一部、木の部分だけが潰れて居る。

これは大変な事をしたと思う。天皇陛下より賜った命より大事な武器を傷つけて、心配になったが、それよりボヤボヤして居れない、みんなの逃げた方向へ向かって追い付かねばならないと、身支度し、小銃と軍刀を杖に使って進もうとするが左脚は、全然神経が伝わらず、野草の蔓が根に引っ掛かって、つい倒れて仕舞う。焦れどもどうにもならない。

太陽も沈み暗闇が迫って来る。何十メートル位進んだであろうか。とにかく灌木の繁みの所迄たどり着く。やれやれこの辺で朝迄野宿と思って居るとフイにガサガサと音がする。驚いて見ると、ノロか鹿のような動物が灌木の繁みの上に頭を出して黒い大きな眼で凝視して居る。どうしようかと考えて居る内にガサガサと音を残して消えて行った。

黒い雲が夕闇を一そう早く暗くする。こう暗くなるともう進む事も出来ない。野宿を決めて四本の灌木に携帯天幕を張って居る内に急に真暗となり豪雨が降り出した。風と共に吹き込む雨は天幕等役に立たず全身濡れて来る。傷口を濡らして化膿してはと、左脚を両腕にて抱えるようにして上半身で雨を避ける。それでも濡れて血の臭いが広がったのか何処から出て来たのか、蚊の大軍、手と顔と首筋に、群がって来た。上着を脱いで頭から破り両手を顔の前に合わせ、防せごうにも隙間からどんどん入って来る。眠る事も出来ない。

暫くして小降りになる。これから先はみんなの逃げた方向に向かって歩く。太陽を見たら南に向ったら朝鮮か、ウラジオの方に出るだろう。こうなっては仕方がない。地図も磁石も道もない。とにかく靴下に入れてる小豆だけが食料である。これから煮る間もないだろうからと、鉄帽で焙っておこうと、雨の中大事に腹の中に入れたマッチで火を燃やそうとしても濡れた小枝と風では火が付かない。諦めて夜の明けるのを待つ。

長い一夜も明けると共に雨も霽れ上がった。片脚を引き摺り半歩半歩の前進、数時間もかかって稜線上に出る。先方は、遥かな地平線迄見通せる。この儘果たしてあの果て迄行けるだろうか。何日かかっても、行

かねばならない。

木の陰より一人の幹部候補生らしい下士官が駆け寄って来る。他の部隊の人間である。どうして一人だけでこんな所にと不思議に思ったが、双眼鏡を貸して呉れといった。そして先方の敵の状況を調べてやるからと言って、どんどん先に行く。やれやれ安心と思いながら片脚で付いて行ったが、何分しても数時間経っても姿形はそれっきり、現われなかった。狡いやつ、何処の人間かと思ったが、一人前に歩けないのであるから仕方がないと諦めて又進む。

昼頃だらうか、大きな道に出た。道には戦車の通った跡らしい筋が、幾つも幾つも残って居る。こんなに沢山の戦車か車両が左右どちらに進んだのかも見当が付かない。南と思われる方向へと向かう。かりに敵や満人に出合ってもどうにも出来ないから、その時はその時、草の茎や蔓に足を取られるよりはるかに楽なので道の真中を歩く。前方にトラック発見、立ち止まって暫く見てても動かない。人の気配もしない。近づいて見ると弾薬箱を満載した、おそまつなソ連軍のトラックである。弾薬箱も破れたものが多く、中味は迫撃砲の弾丸に似たものばかりである。

故障したので弾薬共々置去りにしたのであろう。戦の混乱状態が察せられる。

さてガソリンタンクに火を付けようか、それとも少し離れた場所から小銃で撃ち込んだら爆発するだらうか、しかし、火を付けてからこの身体で何メートル位離れた場所迄移動出来るかと、あれこれと考へておったが、こうなってはトラック一台分の弾薬を吹き飛ばしたところでどうにもならないような気もして又トボ、トボと南に向かって進む。

広大な広野に枝葉のない巨大な枯木がポツン、ポツンと立って居る。突然涙が出て来た。本当に噂の通り戦争は負けたのであろうか。情けない。力が急に抜けて来た。これから日本はどうなるのであろう。そしてこの満洲に居る関東軍の将兵は、在満日本人は、そして自分はどうなるのだろう。自棄な気持になり一人軍歌を思い切り大きな声を出して、日の落ちかかる夕焼けの空に向かって歌いながら又トボ、トボと歩く。

しばらくして道は下り坂となり雑木林へと続いて居る。太陽は沈み空だけが未だ明るい、林の中に入ると小さい小川が流れて居る。

蔦やタンポポの葉もある。ここで野菜を煮て夕食とし露営しようと身の廻りの装具を外し、鉄帽に水を汲もうとした。その瞬間四、五名の足音が聞こえ林の暗闇から将校二名、兵三名の五名が出て来た。驚いた。廣

参拝長崎平和祈念像

川瀬鳳山

長崎に鐘は鳴る鳴る非核を願い

偃武を祈りて永遠に
黷武収まって幾星霜
歳月難苦を忘れ
禺行再発を柾る
視よ孤児潸潸たり親搢の声
今だ核傷に窘しむ二都の民
往事の悲恨肺腑を抉る
歓楽奢傲志操失い
太平続いて飢餓を忘る
なれど中東戈収まらず
鉦鼓は響く黒海の畔
徼レ利恃レ權乱火徳
東西国国化二狂瘨一
欲レ災匪レ将無辜衆
回想崎陽盛夏天
長崎は史跡に富み
風光明美人情厚く
陶潜もうらやむ桃源郷
耳を澄ませば今日も聞える

「ワラベ」の歌が
渚を渡る舟歌が
乱す勿れこの寰宇
犯す莫れこの山河
妖光一綫殞二崎陽一
阿鼻索レ親需レ水徜
迓レ忌偲レ朋望二核絶一
何為弄レ核是倀倀

平成七年七月廿日　　合掌

（註）
偃武―平和
黷武―理なき戦い
奢傲―おごり・たかぶり
戈―同朋相撃つ戦い
鉦鼓―かねとたいこ・攻防
徳―あやまち
狂瘨―狂暴な気ちがい
無辜衆―つみのない人々
崎陽―長崎の別名
陶潜―中国詩人陶淵明
寰宇―世の中・世界
妖光―原爆の
一綫―ひとすじ
殞―おちる・死ぬ
阿鼻―無間地獄・火
何為―どうして
倀倀―方向がわからない狂人

田部隊長、石原中隊長と同年兵の三名である。一人茫然とみんなより先に来て立って居る姿にみんなも驚いた様子。加藤副官、丸山軍曹の戦死報告。形見の軍刀を渡し、同年兵に小銃を持って貰い、跛になるから我慢して進めとその儘すぐにみんなと一緒に行軍が始まる。夜の行軍である。ここで遅れてはいけない。必死に追従する。　(了)

(『迫撃第十三大隊史』より転載)

トラック島の敗北 (2)

加藤一

四　トラック島要塞

昭和十七年十一月一日付で私は、水兵長になる。トラック島第四通信隊へ勤務してから一年四ヶ月経ってのことである。

その頃の島は、実に平穏で、食料は豊富にあった。嗜好品なども潤沢で、南洋の気候には長持ちしないので、兵隊に強制的に買わせる始末であった。

暫くすると、ガダルカナル島で戦って来た主計兵曹が転属して来た。ある日、その兵曹が椰子の木に登ってゆく大きなトカゲを見付け、私に「ガダルカナルでは食べるものが無かったからあのトカゲを獲って食べたのだ。旨いもんだよ」と教えてくれた。しかし、私は一瞬嫌な気持ちがしたのである。

私は、四通の本部より、トラック島の冬島に第四根拠地として新設される第四分遣隊へ配置換になった。

冬島へ行くにはポンポン船で三時間も海上を走る。しかも南の水道の入口付近である。この島には強力な送信機二台を据え付けた。当時としては最大の出力を持つ送信機で、発信してその電波が地球一回転して受信出来る性能の優れたものであった。これらの機材・機器・建設資材を運ぶポンポン船の船べりを見ると、珊瑚礁の海の水は青銅色に澄んでいて、海底の白砂までが綺麗に見える。気がついたら、なんと大きな鮫が数匹、船に寄り添うように泳いでいるではないか、魚雷のように見える鮫には身震いし、うんざりした。

やがて分遣隊の隊員五〇名の兵舎も送信所も完成し、トラック島全域の通信設備は完璧となり、分遣隊の当直勤務も始まった。

昭和十九年二月七日のことであった。敵の偵察機一機が上空に飛来し、丹念に偵察していた。この時トラック島二ヶ所の飛行場から二〇〇機が舞い上がった時には敵機は姿を消していた。

二月十日、旗艦大和を主力とする帝国艦隊の艦艇は島から姿を消してしまった。作戦行動によるものだろう。しかし、トラック島の環礁内全域には海軍・陸軍の輸送船や油槽船が来るべき作戦に備えてであろう、何十隻と停泊していて、冬島から周辺の水平線上に船影の切れるところがない程であった。

トラック島は、外南洋やラバウルへ向けての重要な中継地点で、南方洋上の作戦と補給の大根拠地であったのだ。米軍としては、今後の日本本土進攻に当たっては背後からの脅威となり、眼の上のコブの存在であったのだ。米軍は、このトラック島を攻略して占領するには、長い時間と莫大な戦力と多大な兵員の犠牲を強いられる。この大きな環礁に囲まれた大小無数の要塞化している島々を、長期間封

新玉小学校爆撃

中川禮子

白くまばゆき日といふ記憶担任が脳
を刳られてゐしといふとも

十九歳萩原ゆきゑうつくしきその名
のほかの思ひを知らず

八歳の子どもの夏麦こがしをふるま
はれにき軒ふかき家に

十年経て今は盲ひし母訪へば白髪の
校長帰られましき

兵も死んだ用務員も死んだ　年に一
度サイダーとすしに吾を待ちくれし

宮城野の園に移りし用務員の妻五十
年の祭りを祭るか

爆弾の破片二階ののきを刺す疎開よ
り祖母と戻り来りし

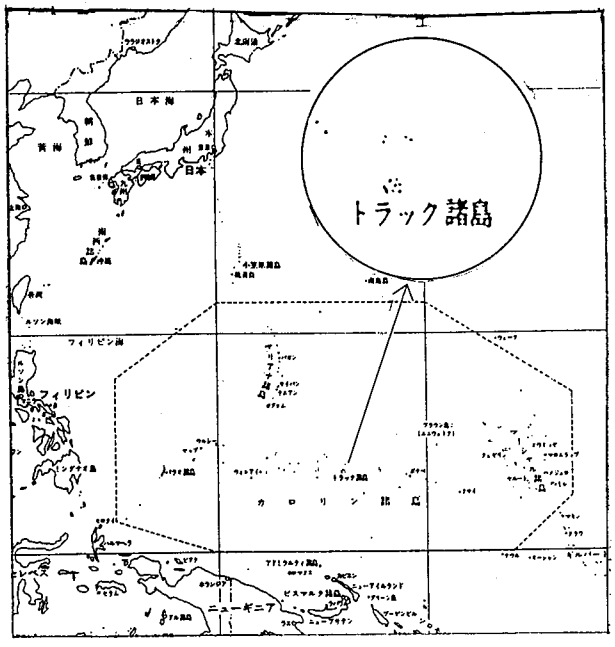
同級生の男の子語るのちの思ひに髪
などの石を浜へ棄てにき

[註] 小田原市立新玉小学校(当時国民学校と呼ぶ)が米軍機の攻撃を受けたのは、昭和二十年八月十三日朝。爆弾が、講堂と使丁室に命中し、職員のうち二名が即死、一名が重傷を負った。なお、講堂を使用していた兵士も亡くなった。

鎖し、四六時中爆撃して戦力の無いものにしたいと考えたのであろう。

昭和十九年二月十七日の払暁であった。私が丁度、〇－四当直の上る午前四時であった。突然島の各方面の監視所より空襲警報が伝達されて来た。今回は何時もと一寸違うぞと嫌な予感がした。

来た！艦上爆撃機B25の編隊である。水平線の彼方から次々と梯団の体形をとって、空を圧してトラック島へ迫って来るではないか。先頭の編隊は、あっと言う間に夏島と竹島の飛行場上空に飛来し、飛行場とその施設を猛烈な爆弾攻撃し、次々と飛来する編隊も同一目標に絨毯爆撃を実施している。



二月七日偵察機一機の空襲の時、あれ程沢山の飛行機が舞い上がったのに戦闘機一機も迎撃せず、僅か五、六機の水上機（下駄履き）が飛び上がったが忽ちにして撃墜されてしまった。

当時、ラバウルの日本軍の基地の空戦は、激烈を極め飛行機の消耗が甚だしく、その飛行機の補給の為、内地から硫黄島、サイパン島を経由しトラック島まで空輸したこの二〇〇機を米国第七艦隊が見逃すことはない。二月七日米軍の偵察機はこれを確認している。しかし敵偵察の時点で、この二〇〇機はラバウルへ飛んで行ってしまったのではなかろうか。そのため、敵の為すがままに爆撃されたと思われる。

一方、米第七艦隊はトラック島環礁外六〇キロメートルから七〇キロメートルの海上空母七隻を交代させて爆撃を繰り返したのである。飽くまでもこの二〇〇機の行方の追求と撃破で徹底的な監視爆撃であった。爆撃の振動が遠く離れた冬島にも伝わって来る。忽ちにして夏島と竹島は爆撃の煙で見えなくなってしまった。同時に島に荷揚げしてある物資倉庫、野積場及び一万トンの石油タンクも同時に爆破され更にその上に焼夷弾を落したのであろう。黒煙濛々と上がり紅蓮の炎を上げている。

一区切りの編隊が去ったら、次の飛行梯団が空を覆うように爆音を轟かせて飛んで来た。飛行機が空を圧する爆音で我々の話す声も聞こえない。

次の攻撃目標は、環礁内に停泊中の船舶・艦艇に向けての爆撃であった。飛行機の爆音の中に爆弾が命中して炸裂する音響、そして船によっては火薬、砲弾を積んでいる船が爆裂するその物凄さ、噴煙と閃光、爆風と音響、飛び散る船の破片がかなり離れた冬島近くの海面に落下する際の水しぶきが見える。今まで毎日眼の前の海に巨体を浮かべていた馴染みの愛国丸と護国丸は瞬時に轟沈されてしまった。あちらこちらで油槽船が燃えている。空は真っ黒い煙に覆われていて島全体が夜のように暗くなってしまった。海上は、全く火の海となり、紅蓮の炎がところどころで高く立ち上がっている。暗くなった空には、いまだに、執拗に飛行機が飛んでいてその姿は怪鳥にように、機関砲を射っている閃光が不気味である。

一体これはどういうことになってしまったのだ。昨日までは全く平和で長閑で静かな南洋の島が、一夜明けた今朝は修羅場となり、火炎地獄となってしまった。環礁内の船は逃げようにも狭い水道を通らなければ外洋に出られないのだ。外洋に出ても捕捉され撃沈されるから、中には沈没を免れる為に珊瑚礁に乗り上げている船もあった。このような船は勿論火災を起こし、最後まで攻撃されていた。

大空襲が始まった四時間後、丁度八時過ぎであった。夏島の四通本部から無線で「冬島の第四分遣隊は敵部隊の上陸があるやも知れず、隊員全員玉砕の準備をせよ」と命令が来た。その電報をとった私は、直ちに先任下士官に連絡した。

早速隊長が全員集合をかけても全員五十名集合する場所もなく、敵機の来襲が激しくその合間を見て、バナナ林の中で小人数が集まり逐次部下に伝達した。玉砕、下着を替え、防暑服から一装用の服に替えた。

玉砕準備のもう一つの仕事があった。各自ビール瓶に火薬を充填し雷管を挿入し、二本ずつ持ち、一本は対戦車に、他の一本は自決用にとのことであった。用意が終わると再び敵機機関砲の掃射が始まって、一人の戦死者が出た。元気の良い男だったが腹部貫通で即死であった。兵舎は火災を起こして全焼し、隊員全員が着のみ着のままの無一物

になってしまった。

玉砕命令、空襲による兵舎の火災で、気がついたらもう昼過ぎていた。

昨日まで環礁内に見えていた各種の船舶は、一隻も浮いていない。沈没を避けていて座礁した船は、原形を留めないまでに破壊されていた。

午後からも敵機は依然として飛来し爆弾を惜し気もなく投下して行く。この時であった。目の前の秋島の島影に三隻の輸送船が爆撃を免れていた。しかし、敵がこれを見逃すことはなかった。忽ち敵機の攻撃が始まった。三隻は川の字のように碇を下ろしていた。中央の船に爆弾が命中し船橋が飛び散り、火災を起こし、次に機関室に直撃を受けて瞬時にして沈没した。他の二隻も群がる爆撃機の前に為す術もなく敢えなく目の前から消えて行った。その船の波間に消えるまでの間、乗船していた人達は、甲板を逃げ惑い、或いは火の海に飛び込む人、爆風で吹き飛ばされる人、目を背ける光景があちこちにあった。同じ日本人が軍人が皆同じに、かくも惨めに残酷に叩かれているのを見て、どうにもならず、遣瀬無い気持ちであった。負け戦とはこんなものだろうか。

暫くすると秋島の輸送船に乗っていた一部の人だろう。ボートで逃れて我々の冬島へ辿り着いた。見れば看護婦、慰安婦、民間人。この民間人は、何処かの島の在留邦人の引き揚げの姿である。皆、夫々どこかに負傷をしている。片腕の肉が引きちぎられている子供もいた。これらの人を誘導していたのは、召集の老兵曹長であった。その兵曹長も、片足骨折して金剛杖のような棒にすがって、唯気力だけで全員を引率して行った。我々のいる此所は、冬島の岬の先端で、難を逃がれた人たちは、島の中央に向かって林の中を歩いて行った。果たして何処へ行くのだろう。いや、どこまで行き着けるだろうか、実に悲惨なものである。本当に地獄絵巻を見ているようなものであった。

我々通信隊員はこのような非常事態には、刻一刻と飛び交う無線の受信と傍受と発信の任務に瞬時といえども勤務場所を離れることは出来ない。見ていて、うんざりする凄惨な光景が展開し、思わず手を合わせる有様が繰り広げられた。それをじっと堪え、玉砕の電報命令を受け、遂には敵機の機関砲の掃射により兵舎は焼かれた。朝四時から日没まで、それは実に長い一日であった。

今まで毎日眺めていた常夏の島トラック島の楽園は一変してしまった。島の東西北の水平線に船影の切れ間のなかった。それが一隻として浮いている船がない。後に残るものは硝煙の匂いと船の燃えた重油の特有の臭さと遥か飛行場のあった竹島と夏島から漂って来る焼跡の異様な臭気はなんとも言えない。

正に白昼の悪夢である。夢であってくれたら、さめればまた元に戻るものを。僕は余りにも非現実的なものを現実として見てしまった。

かってよく歌われ、また耳にした軍歌を、ふとそれを思い出していた。

ここは御国の何百里
　離れて遠き満州の
赤い夕日に照らされて
友は野末の石の下

今我々が置かれているこの地は、御国から何千粁も離れて遠い南洋であろう。日没の赤い夕日に船の残骸は照らされて、そこの海には何万の、我が同胞が水漬く屍、海のもくずとなっているのだ。

日露の戦とこの戦争の規模と様相の違いは、何にたとえたらよいのであろうか。いまの戦は凄絶で残酷で、こんな悲惨なことはない。

執念深い米第七艦隊の空母七隻はトラック島珊瑚礁の外洋六十粁の辺りから遊弋しながら、十七、十八、十九日と三日間爆撃・銃撃・雷撃を繰り返し、海上の船、桟橋は勿論のこと陸上の建物は徹底的に破壊されつくされた。その為周辺の一木一草すべて根から掘りかえされた。とにかく、敵は、無差別に爆撃し物量にもの言わせて大量に爆弾等を投下し、不発の魚雷は陸上に上がっていた。このような攻撃で、珊瑚礁は沈下し、海水が椰子の木の生えている根本まで上がって来た。熱帯雨林のマングローブの林は、爆撃と焼夷弾により焼きつくされて無くなり島周辺には魚が寄り付かなくなった。

平成元年（一九八九）毎日新聞社で発行した『昭和史全記録』に「トラック島の全面敗北」として概ねこのように記述してある。

「昭和十九年二月十七日連合軍がトラック島大空襲、四百五十機が飛来し、二百七十八機の日本軍機を破壊、二月十八日トラック島周辺の輸送船二十二隻をはじめ、四十二隻が米機動部隊の餌食となり沈没。陸上施設破壊。トラック島は基地の機能喪失。米機損失二十五機。五万の日本軍は取り残された」

この記述からは、トラック島の壮絶な惨状は記述されず、様相を読み取れない。太平洋戦争は過去のものと風化させようとしているのか。いやいや風化させてはならない。戦争とはかくの如きものだと語り継いでいかなければならない。

なおこの章に於てこだわることは、日本軍機二〇〇機のことだが、この記録によれば空襲により破壊され

たとある。昭和十九年二月七日、米軍一機の偵察に二〇〇機が舞い上がったのに対して二月十七日の空襲に対して一機も飛び立たずに破壊されてしまった。若しこれが事実としたらまことに空しいことだ。

五　孤立無援

昭和十九年二月十七日・十八日の両日、米軍の空母七隻を擁した優勢なる機動部隊の大空襲により、敢えなく潰えたトラック島は、島の上には食料も住居も、建築資材も衣料も医薬品も、生活に必要な品物は一切無くなってしまった。正に不毛の島となり、島の取り残された五万の将兵は今後どうやって生きて行くかが課題になった。

我々第四分遣隊の衣服は今着ている服、即ち玉砕の為に着替えた服それだけである。今まで我々が持っていた衣服と隊が貯蔵していた食料は、十七日の空襲で兵舎が焼けるときに焼失してしまった。

日本本土からの補給が絶えたからには、生きていく為の主食を自給自足可能なサツマ芋とし、年間の食料を確保しなければならない。サツマ芋は、熱帯であるから成長が早く、成長したイモ蔓の先を切って船底型に地面に挿せば直ぐ根付いて成長して収穫出来るので次々と畑を開墾しては植え付けた。それでも主食のサツマ芋の配給は一人一日四百グラムで、握り拳の大きさ一個である。サツマ芋の外にタピオカを作り、沼の中に生えているタロ芋は取り尽くしてしまった。味噌汁は味噌がないから、海水を真水で薄めて、草の若葉をホーレン草に見立てて入れて食べた。

このような状況下で、海軍に志願で入って来た食べ盛りの若者達は、これで足りる訳がない。サツマ芋を盗んで生で食べるから下痢を起こす。下痢を治すクスリは、島にはないから下痢が次第に高じて栄養失調になり衰弱して死亡する。その数は、空襲の際に弾に当たって死ぬよりも多かった。無念と言う他に言いようがない。

ガダルカナル島から転属して来た主計兵曹の語った椰子の木のトカゲを食ったと言う話が今漸く理解出来た。我々は、勿論トカゲもネズミも、また煮て軟らかければ草の葉も、パパイヤの木の根や椰子の木の青い部分も常食にした。島民の主食とするパンの木の実も食べた。パンの木の実は、実るのを待ち切れず食べるので、島民の食料を脅かすことになるから、パンの木の実は取ることを禁止された。

ここで生活する上で不自由したのはマッチであった。そこで厨房の火は、絶対絶やさぬように種火を保存した。この種火を燃え盛らせるには薪木と小量の火薬を使った。

ところが、戦闘用の火薬には手が着けられない。そこで以前米軍が無差別爆撃した時、陸に乗り上げた魚雷の爆装部分を運んで来て、信管を外して内部を解体した。私は中に詰まっている火薬を初めて見た。それはコンクリートそっくりの色をして堅く円筒内に詰まっている。これを砕くと粉になる。これを隊の火薬庫に保管して必要なだけ出して火着けに使ったのである。

また或る時、海辺から離れた透明な深い海底に不発爆弾のあるのを発見した。隊員が素潜りで海底を転がして数日掛けて水際まで運んだ。これも信管を外してこの火薬を燃料用として保管したのである。

我々島の日中の行動は迂闊には出来ない。米軍の艦上爆撃機の執拗な偵察により、たとえ一人でも兵隊と見ると機銃を打ち込んで来る。二人以上になると容赦なく爆弾を投下して来た。ある日、敵機が低空で飛来して宣伝のチラシを散いて行った。そのチラシには「トラック島の兵隊さん、芋をたらふく食って死んでいけ」と書いてあった。よく偵察しているものだと思った。

米軍は、トラック島に対し壊滅的打撃を与えたので、この島の戦略的価値はないと見たのである。米軍にとっては、日本本土攻略に当たって背後の心配がなくなった。その年の七月、米軍はサイパン島、グアム島を奪取し、B29による日本本土爆撃の基地にしたのである。太平洋の制海権と制空権は完全に米軍のものとなり、日本からトラック島への補給は完全に閉ざされ、補給船の来ることは夢のまた夢となってしまったのである。

昭和十九年以降、即ちサイパン島、グアム島が陥落してから、米軍のトラック島への爆撃の動きが変わって来た。それは日曜日を除く毎日、午前と午後、定期便のように、長距離爆撃機B29が三十機から四十機編隊で飛来するようになったのである。そして竹島、夏島の飛行場、その他目標を定めて爆撃した。これは多分米軍第七艦隊がこれからの戦略目標に行動を起こして移動したのだろう、B29が艦上爆撃機B25に代って、サイパン島、グアム島からトラック島へ監視と爆撃訓練並びに編隊演習を兼ねて飛来し、これが終戦まで続いたのである。

これでトラック島に取り残された陸海軍の将兵、民間人の五万人は、鬼界ヶ島の俊寛より哀れな状態になったのである。　(了)

(足柄上郡清水小学校昭和八年卒業生芙蓉会喜寿記念誌『富岳』より転載)

生かされて
私の軍隊体験 (2)

磯部正人

二年兵とは名のみ

入隊した翌年即ち昭和十七年の一月十日に第一線の上等兵に進級しました。星が一つ増え三つ星になったのです。

進級のよろこびも束の間、冬期演習が始まりました。何しろ昼間でも零下二十五度から三十五度には気温が下る頃です。屯営を出てから既に十時間近い間、行軍に次ぐ行軍です。しかも三十キロを超す装備を身につけています。

陽があるうちはさほどではありませんが、夜になると急に疲れが出て来ます。雪が降り積っている大地の上を障害物がない所は、道路といった状況の中で、唯ひたすら行軍の連続です。月はありませんけれど、雪明りで、ぼんやりと周囲の様子は判ります。

疲労がだんだんと積って次ぎに来るのは眠気です。夜行軍は、火の気は使用禁止です。演習とは云え、灯火が仮想敵に見つかりこちらの所在が判るからです。でももうねむくてねむくて、そんなことは云ってられません。肩にかついだ小銃の床板を持つ手をはなして腕で押さえ、左掌で囲いを作りその中で煙草に火を付けます。一本吸いますと暫くは眠気から解放され、空いているお腹まで満ち足りたような気分になるから不思議ですね。

でも一時的なもので、そんなに長く続くものではありません。眠りながらでも足は前に進んでいます。そして四列縦隊で前進しているので、前を行く戦友の背嚢に縛りつけてある鉄帽に自分の頭をぶっつけて、痛さに眠気が覚め、歩き続けるようなことでした。

また、こんなこともありました。演習何日目だったか覚えはありませんが、ある夜満人の家を借用して家の土間に炭火をカンカンに起こして暖を取りました。行軍して居る時は体が温まり、従って汗まで出て寒さを感じません。

最初歩き始めた頃は肩にかついでいる小銃の床板を軍手(手袋の軍隊呼名)のまゝで握っています。若し素手で握るとピタッと床板(小銃を肩にかまえた時肩に当る部分で鉄で出来て居り、小銃の他の部分と全く同様に何時もピカピカに磨きこまれていた)に掌がくっついて放れなくなります。無理にはなそうとすると手の皮が破れます。それが行軍を続けていると段々汗ばんで来て、素手でつかんでも体の温もりで床板がくっつかなくなり、放したりつかんだり出来るようになります。

そんなに汗ばむ程になるのに、一旦停止して身体を動かさなくなると数分の間に体が冷えて来るのです。それで焚火や炭火が恋しくなるのです。

炭火にあたり好い気持ちになっていましたが、生理現象を催したので屋外に出ましたら途端に気分が悪くなり、ばったりと雪の上に倒れてしまいました。幸いに戦友達によって家の中に連れこまれ、何時間か後に大分気分も良くなりましたけれども、頭痛があって遂に演習脱落、トラックで屯営に送られたのでした。

前後しますが、昭和十六年の暮れに幹部候補生の採用試験がありました。私も入営前には軍人になることに或る程度の憧れを持って居りましたのですが、実際に軍隊に入って約一カ年内部を見たり自分で経験して、この軍隊は余り長く居る所ではないとの感触を持つようになりました。当時は徴兵検査で入営した者は、二年の軍隊生活を終ると除隊して予備役に編入され郷里に帰れる制度でした。

ところが幹部候補生に採用されると一ケ年間、内地の予備士官学校に入学して教育を受け終ると、原隊復帰後更に二年間将校として勤務しなければなりませんでした。結局四年居て陸軍中尉になり予備役編入除隊になるのでした。

二年で除隊出来る兵隊の方がいいなと思った私は試験に受かってはならないとの判断を下しました。

試験課目は軍事課目以外に国語、英語、数学位だったと記憶して居ります。答案用紙に名前だけ書いて後はまるっきり白紙で答案を提出しました。一緒に第十一中隊から鎌倉師範卒の小池君、井上君、村野君、杉山君と私の五人が受験しましたが、私を除く四人は合格し、私は不合格で今頃叫った訳でした。

合格発表後に私は中隊長室に呼ばれ渡辺中隊長からひどくおこられ、又、人事係准尉からも、こっぴどく、こってりと油をしぼられましたが、「判りませんでした」で押し通しました。

このことが原因で翌十七年四月、要注意人物として新編成の迫撃第十三大隊編成要員としてとばされることになったのでした。

とにかく、それまでは彼等四人と一緒の内務班で生活して来たのですが、学科の勉強でも野外の演習でも、又、小銃実弾射撃でも皆さんと対等にやって来たのですから、中隊長以下中隊の幹部に、試験不合格を不思議がられかつ又、要注意人物として見られても致し方無かったと思います。

間もなく彼等四人は、久留米予備士官学校に入学し

ました。そして村野君は立派な見習士官として在満の独立砲兵大隊に配属になったようです。残る三人は同じく立派な見習士官として歩兵第三十聯隊の留守隊である高田歩兵第百三十聯隊に配属になり、後に聯隊長山崎保代大佐指揮の下にアッツ島守備の任に就き、十八年五月末、アメリカ軍との壮絶な戦闘の後玉砕、還らぬ人となられたと聞いて居ります。

人間の命は一寸先が判らないものですね。若しあの時まともに答案を書き、若し試験に合格して居たら私も彼等と同じ道を辿って居たかも知れません。

澤田潤一郎君（右）と私
車手用の防寒服・防寒長靴の出で立ち。昭和十八年春先撮影。写真師は、酒保写真班勤務で同年兵の朝岡輝君。バックは第二中隊車庫の板壁、残雪が見える。

戦況の変化と共に
北満を転々と

先に一寸触れましたが、昭和十七年四月に迫撃第十三大隊（満洲第三、一〇七部隊）の編成要員として転属を命じられ、歩兵第三十聯隊（満洲第一七七部隊）からの転属者を主力として、迫撃第十三大隊第二中隊が編成されました。編成地はチチハルで此処で約一ヵ月を過ごしました。

季節は春、五月雪解けも終わり短い春が訪れて来ます。広い野原一杯に春の花が沢山一度に色とりどりに咲き乱れます。中でも紫色の可憐な花をつける迎春花（インチュンホア）は、当時流行歌にも歌われていました。そんな環境の中で編成は終わりました。

私は、人事係山田武男准尉の助手として、毎日中隊事務室で兵籍名簿の整理記帳をして居りました。

五月末に部隊は富拉爾（フラルギ）基に移住しました。此処は、日露戦争当時、敵情偵察のため敵地深く潜入した沖・横川の二人の軍人が捕らえられて処刑された所でした。此処での一ヵ月も私は、相変わらず人事係准尉の助手として演習には行かずに事務室暮らしでした。時たま営舎外に出ると、鈴蘭の愛らしい白い花が沢山咲いて居て、とても素敵な香りを漂わせて居り、そして小さな両の掌に包めそうなリスに似た小動物が餌を求めて走りまわって居たことを覚えて居ります。

六月末になって愈々駐屯地である国境の街、東安省虎林（コリン）県虎林に移駐しました。新しく編成された部隊だから駐屯地に移動して来ても入るべき兵舎は有りません。なだらかな丘陵地に相応の幕舎がしつらえて有り、その中での生活が始まりました。そして駐屯地付近の警備任務に就きながら受領した迫撃砲、トラック等の使い方に習熟し戦闘訓練に励みながら、住むべき兵舎も自らの手で造築したのでした。

私は、迫撃砲の砲手ではなく、自動車手として専門教育を受けました。早速運転技術を身につける訓練が始まりました。ニッサンのトラックが第二中隊段列に十一輌配備されて、私達二年兵（と云っても初年兵は未だ入って居りませんので事実上は初年兵みたいなものですが）と三年兵が訓練を受けました。

訓練を受ける練習車は三台で夫々に助手が就きました。社会で運転していたプロの人達でした。確か澤田潤一郎君と他二人だったと思います。澤田君は、後に部隊の郵便車の運転手として勤務して居りましたベテランですが、私が転属をする頃には、まだ部隊に居たように思いますが定かではありません。五十数年も前の事ですから致し方ないと諦めの気持ちです。元気で内地の土を踏んでいるでしょうか。

訓練の仕方が面白かったので今でも覚えて居ります。まず車の後輪車を持ち上げる為に左右後車輪の内側の車軸を台に乗せ、後輪車が地上十五糎位はなれるようにします。これで準備OKです。エンジンを始動し、ギアを入れてクラッチをつなぐと後車輪は回転します。道路上を走るのと同じ状態でクラッチの切り具合やつなぎ具合、又、増速減速に伴うギアの入れ具合などの練習を致しました。当時の車輪は、走行中の減速は必ずダブルクラッチを使わないと出来なかったので、運動神経の鈍い人は、中々うまく行かず上手になるまでには、ガリガリと音をたてゝ随分とにぎやかな事でした。

一週間でこの訓練は終わり、直ちに路上運転に移りました。現在の自動車学校のように長い期間かけて技術の習得をするようなことはありません。早速、虎林街を通り抜けて田舎道を走ります。二日間も練習すればもう一人立ちです。時には道路から外れ落輪することも有りますが、道路の側溝は余り深くなくて、ハンドルをきりながらローギアで走れば、何時の間にか道路を走っていると云った状態でした。とにかく習うより慣れろです。何もかも訓練の積み重ねこそ大切です。

（続）

戦後五十年の夏

武田敏治

八月十五日が近づいてくると、あの日のことが鮮烈によみがえってくる。終戦五十年目を迎える今年の夏は、感慨ひとしおである。

終戦間際の三ヵ月、家族は、父と私を除き、久野坊所（小田原市）にある父の実家の竹藪に小屋を建て、足に障害のある叔母と共に疎開していた。

六畳一間に、七人の生活だったが空襲の恐怖から逃れるには他に方法がなかった。

家では父と小学校五年生の私と二人の生活が続いていた。

十四日の夜半のことだった。

警戒警報のサイレンで眼をさまし、身仕度を整え、脚絆を巻きながら軒先で父となにやら話しあっていた。

空襲警報のサイレンの記憶はないが、突如B29が低空からゴーという振動を響かせながら通り過ぎていった。

〝ああ〟と暗やみの空を見上げた時、店の前から一丁田、青物町、宮小路、（浜町、本町）にかけて焼夷弾が焔を吹きながら雨のように降ってきた。

焼夷弾の蓋を持つ筆者

父は燃えさかる家の消火に向かった。私は路端の焔を吹く弾に、防火用水からバケツで水を汲み出し夢中でかけていた。

その時、カーン、カーンと耳を裂くものすごい金属音がした。

それは、後から空気の抵抗を受けながら落ちてきた焼夷弾の蓋が、アスファルトの道路にはねかえる音だった。

直撃を受けたら即死、あわてて我が家にとび込み命びろいをした。

外を見廻わすと町内は軒並み炎につつまれていた。「隣のおばさん達と逃げろ」の父の声で、農村地帯だった山王原方面へ一目散に駆けていった。

抱えていたのは、数日前、母が丹念にすげかえた新しい鼻緒の下駄と掛け蒲団だった。隣りの就学前の少女も、大きな蒲団を肩にかつぎ夢中で走っていった。

山王川の汐留橋を渡り辿りついた農家の縁側で一睡もせず、空を焦がす真赤な炎を見ながら、夜の明けるのを待っていた。

朝、戻ってみると、我が家は無事だったが、海岸へ向かう商店街の燻りの中に残っていたのは唯一つ、安田貯蓄銀行（現・さくらい呉服店）だった。

そして、昼に玉音放送、裏庭の柿の木の下で近所の人達が集まり、憔悴しきった表情で聴いていた。

大きな欅の蝉の鳴き声が、音声の悪い玉音放送を一層聴きとりにくくしていた。

〝戦争は終ったよ〟と父が呟いた。

敗れた悔しさと、ホットした安堵感が交錯して複雑な気持だった。

毎日、敵機に脅えていても、日本は絶対に負けないと信じていた私には、敗れたことが本当なのか、よく分からなかった。

あと一日早く戦争が終っていたらと言いながら、肩を落として焼跡の片づけに足を運んだ父の背中が眼に浮かぶ。

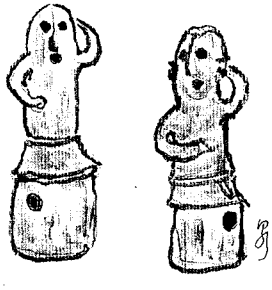
陽が沈む頃、厚木航空隊の戦闘機が、飛行士の見えるくらいまで高度を下げ、徹底抗戦のビラを撒いていた。

しかし、その晩から不気味な警報のサイレンも鳴らず、〝ああ、本当に戦争は終ったのだな〟という実感が湧いてきた。今日のように、太陽の眩しい暑い日だった。

五十年前、私達は米軍の艦載機の機銃掃射に追われ、空襲で登校もままならず、校庭は畠になって遊ぶところもなく、白米の弁当は夢の又夢、大変な時代だった。

わが国は、平和を当たり前のように受けとめ、冷戦の終結後も絶ゆることなく続く民族紛争の悲劇に対してなにか別世界のように無関心を装っている。

戦争による悲惨さを充分に知り尽くしているわが国が、宗教・民族を超えて争いのない世界の実現に真剣に取り組む姿勢を内外に示してこそ、戦後五十年が価値ある節目になってくるのではなかろうか。（了）



五十年前のある風景
―機銃掃射の中で―

剣持芳枝

最近私は健康のためにと努めて散歩を心がけている。町内の天神社坂道を上り城内高校を左手に、今度はだらだらと坂を下ると報徳二宮神社の前へ出る。藤棚の下では幾人かの老人がベンチに腰かけ楽しそうに語り合っている。お茶壺橋を渡るとお濠の水面に大きな蓮の葉がふわふわと風に靡き、その間から花の蕾がふっくらと可愛い姿をのぞかせていた。コバルト色の空に松の緑がよく映えてまるで小田原の歴史を物語っているようだ。

この空と同じ空の下で五十年前に悪夢のような戦争が繰りひろげられたとは信じられない事実である。ふと昔の思い出がそっと私の脳裡をかすめる。

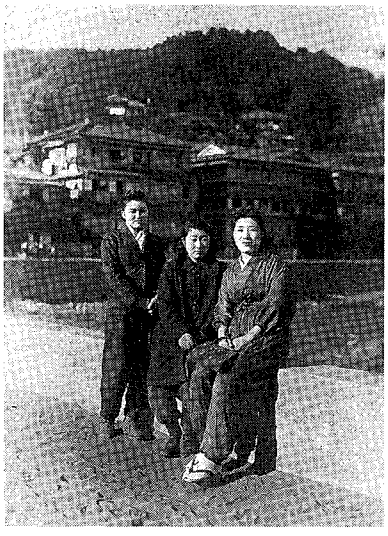
戦争もたけなわになった頃、私は女子挺身隊逃れのため小田原市役所の教育厚生課に勤めることになった。当時若い男性は殆ど出征して居らず、吏員は老人か戦争の負傷で帰ってきた人達だけだった。十代も終わりの娘盛りを化粧品も思うままに使えず、着るものと云えば地味なもんぺだけ、食糧事情の極度に詰まった頃には朝は雑炊、夜は麺類お昼の持参のお弁当が何よりも楽しみだった。

当時、私達は、何処へ行くにも雑嚢と云って、薬品や保存食を入れた肩から下げる袋を肌身離さず持っていた。その頃小田原の象徴隅櫓は、敵機の目標になるとかで白壁が灰色に塗りかえられていた。四月になっても、お濠端の桜は、肥料不足や手入れ不足で皆枯れていた。ただ一本、私の勤務部屋のすぐ前の庭に大きな幹の太い桜の木が、我が世の春とばかり美しい花を咲かせていた。その近くに十五、六人は入れただろうか大きな防空壕があって、度々の空襲にはその中へ逃げこんだ。その頃すでに敵の艦載機は低空機銃掃射を行いはじめていた。警戒警報から空襲になると、期せずして爆音のひびき、半鐘の音が高らかに鳴る中を、私達はいっせいに防空壕の中に入る。風は強くなま暖かい、時折ひとかたまりになった花びらが防空壕の入口から音もなく私達の体にふりかかる。爆音がひときわ大きくなった時思わず背を丸めて隣の友の背によりかかる。ババン！ババン！一瞬戦慄にも似たものが背すじを走り息をのむ。次の瞬間、「あゝ助かった」爆音の遠のく音が聞かれるようになった。皆はほっと安堵の胸をなでおろす。友の背に花びらが二ひら三ひら、わたしはそっと指で花びらを自分の手のひらにのせた。明日の命もわからないこのような時代にも何んの変りもなく咲いてくれた桜の花に、感謝とも喜びともつかぬ感動が胸にせまり涙が頬をつたわったのを覚えている。空襲警報解除になるまでの壕内での話の中心はたいてい食べ物の話だった。誰かが「どうせ死ぬのだったらその前にお煎餅をお腹いっぱい食べて死にたいわ」そのうちに、「私は餡子のいっぱい入ったお饅頭」、「私はケーキ」まだ食べ盛りだった私達にとってそんな話で気を紛らわすより他なかったのだろう。

空襲のない平穏無事の昼休みの時などはよく「百人一首」を詠んだりした。「百人一首」と云っても、当時は軍国調豊かな「愛国百人一首」だった。戦時中は愛も恋も一切御法度だった。今は俳句を趣味としている私だがその頃は短歌が好きだった。紙不足の時代でも役所では割合にザラ紙が豊富にあったので、よく書き損じた紙の裏を表にして、ノートのように綴じ、歌集のように作っては楽しみにしていた。その愛国百人一首は殆ど忘れてしまったが、「わが胸の燃ゆる想いにくらべれば煙はうすし桜島山」　一番興味のあった歌として覚えている。燃ゆる想いが愛国心であることはわかっていたが、考えようによっては、恋歌とも意味が通じるので娘心にも好きな歌のようだった。戦争は敗戦に終わった。

なぜか私は、この季節になるとあの頃が思い出され、先輩や同僚の一人一人の顔が忘れられない。あたら青春を戦争に奪われ後悔している人もあるようだが、私には何時までも欲しがりません勝つまではの精神が心の何処かに存在しているようで、そのお陰で戦後の苦労にも耐えられ、今は晩年の落着いた生活に甘んじて居られる自分を幸せと思っている。日本の平和が何時までも続くことを心から念じている。

(了)



昭和20年1月5日
熱海海岸にて
右端筆者

戦局窮迫下
東京帝国大学に開設の科学研究補助技術員養成所

川上秀子

昭和十九年、私は県立小田原高等女学校の四年生になっていました。戦時下の女学校では、二年生になったとき、四クラス中英語が学べるのは一クラスだけになりました。また、音楽の教科書からはアメリカやイギリスの歌曲は黒く塗りつぶされました。

私達は小田原市久野の日新工業に八月十五日から動員され、工員さん達と一緒にハンマーを持って、飛行機のフロート等の製造に当りました。やわらかい鋲の頭をハンマーでたたいて穴の真中につぶしてゆくリベット打ちとかいう作業です。熟練するにつれ、結構うまくいって工員さんにほめられれば仕事も楽しくなるものです。

そんな中のある日、先生からこんなお話がありました。

「東京帝大に科学研究補助技術員養成所というのが出来て、来年卒業見込みの者でも応募出来ます。」ということでした。

みんな働いているのに申し訳ないけど勉強させてもらえるのなら受けてみようかと、軽い気持で先生にお願いしました。親には事後承諾でした。養成期間は十一月から三月までの五カ月で、三月三十一日の女学校の卒業式と同時に終了となるということでした。十数人受験して合格したのは二、三人だったと思います。東京から地方へ地方へと盛んに疎開している時代に逆行して、昭和十九年十月三十一日、入学式をすませ、本郷の東京帝大に通うことになりました。

朝は小田原発五時二十五分の東海道線に乗るため、真暗な中を板橋の家から三十分歩きました。数値計算科、科学分析科、高周波科、冶金科、設計科、精密計測科等、七科で百三十五名が入学しました。後で聞く所によりますと、全国の帝大にこのような養成所が設けられたそうです。

先生は、助教授、講師、大学院生等、私は数値計算科二十名の中の一人になりました（男子は四名）。

何しろ昭和十九年から二十年にかけてですから何度も空襲にあいました。三月十日の大空襲で浅草、江東等下町が夜半に襲撃された際は、やっと東大にたどり着いたのですが帰るのが大変。焼野原のくすぶる中を、本郷から昭和通りを歩いて新橋に漸くたどり着き、動いていた東海道線に乗ることが出来ました。小田原に着いた時は十二時を回っていましたので、父が心配して迎えに来てくれたのですが、行き違いになってしまって、深夜の小田原の街を行ったり来たりした想い出もあります。又、ある時は帰り途に空襲にあって日本橋の日銀に逃げ込んだこともあります。ものすごく立派な建物で、ここなら大丈夫と思いました。

東大の工学部も地下室があり、工学部の建物は安全とタイコ判がおされていましたので私共は空襲時にも屋上に上って、高射砲がB29を迎撃しているのを眺めたりして居りました。

二十年の一月には二期生が入り、私は、三月に養成期間が終って、いよいよ工学部の土木工学科に他の一人と共に配属になり、〝雇〟の辞令をいただきました。

日本では物資がないので、実験すべきことをすべて机上の計算でする他はなく、そのお手伝いをすることになったのです。若い研究者や学生で、文科系の人達は早くから応召され、理科系の人達は遅くまで残っていましたが、最後は皆いなくなりました。

当時の計算には、計算尺（スライドする物差しのようなもの）と計算機が使われていました。計算機といっても今のとは全然違います。博物館行きになっていると思いますが、右手でクルクルとレバーを廻しチンと音がしたらスライドを動かすもので、これで掛け算、割り算が出来ました。英文タイプライター位の大きさの機械でした。

あけても暮れてもチンガチャガチャと膨大な数値計算をして実験のお手伝いをしていた訳です。

前後になりますが、養成期間の勉強は、今の高校数学全般をさっと一通りしたようなもので、朝は八時から夕方四時迄みっちりでした。

後に理学部長になられた植村先生の三角法のテストが印象に残っています。

先生は用紙を配られると一寸説明をして、「時間制限しないから、何ん時でも、出来たら教卓に出しておいて下さい」と仰言って、教室から出て行ってしまわれました。

私達はバラバラに席をとって、頭をふりしぼって、薄暗くなる迄がんばって提出しました。

後に私も高校の数学教師になったとき、このことを思い出して実行しました。

私のテストの時間割を二時間目に組んでもらって、〝時間制限〟しないから、なん時迄でもねばってごらんなさい。」と申しましたら、昼食もとらず二時頃までがんばってくれた生徒が何人か居りました。

数学という学問は、じっくりと取り組んで、糸がほぐれるように正しい解答が見つかった時、どんなに嬉しく、また気分のよいものか、そのダイゴ味は経験者なら御存知のはずでしょう。現在の大人数の一斉授業、コンピューター処理されるテスト等には人間の心の通いとか、じっくり時間をかけて考えるといった大切な要素が欠けてしまっています。

こういう訳で私は、友達が工場で働いている間に、貴重な体験をさせていただきました。

すまないような気もしましたがこれもお国のための戦時体制の一つでした。

東大助手の方の仕事は終戦と共に辞めました。そのまま残っていれば、後に有名になった天下の東大の助手でいられましたものを。

戦時学徒の落書

昭和六十二年秋、小田原図書館の依嘱を受けて「報徳集書」を調べているときの事だった。

一冊の本から古くなった更紙特有のカビ臭さがする、図書閲覧表が出て来た。証紙を貼る欄があり、閲覧が有料だった頃のもので、現在のよりタテに二倍近くの大きさがある。用紙の裏面にインクで何かが書かれていた。閲覧表としてでなく落書に使われていたのである。

しかし、一片の落書として、見過ごす訳にはいかなかった。

君　学徒ハ醜ノ御盾ト出デタツ強靭ナ五体ニ
晴捍ノ闘魂ヲタギラセ
皇国ノ隆盛ヲ双肩ニ担ウテ
学業ニ訣別シ
名モイラズ
命モイラズ
只完爾ト微笑ム君ガ顔
悠久ノ大義ニ徹シタ丈夫ヲ見ル
思ヒ浮ブルガママニ閲覧表ノ裏ニ
イタヅラガキヲスル
僕モ必ズ空デ死ヌ
君モ又必ズ空デシネ
君ハ南海ニ散レ
我ハ大空ニ死ナン
新山君萬歳　荒鷲受験会

この文の表現の巧拙は別として、制海権、制空権を敵に握られ南太平洋上に、死闘が繰返されている苛酷な戦局に、一人の若人、仮にA君としよう、そのA君が、感情をひたぶるに高揚させ、歌いあげた一編の詩である。

この詩は、『劇物語　二宮尊徳』という本の間に挟まれていた。奥付を見ると、昭和十七年四月二十五日発行である。A君が記した年を推定すると、昭和十八、九年頃か、数えてみれば、書かれてから四十余年は経っている（現時点からは五十一、二年経つ）。まるでタイムカプセルから取り出したようなものだ。現在とはあまりにも掛け離れた環境となっている。

わが国が、二度と戦争という忌まわしい事態に遭うことは、先ずないだろう。若人が、再びこんな文を綴る破目になることはあるまい。

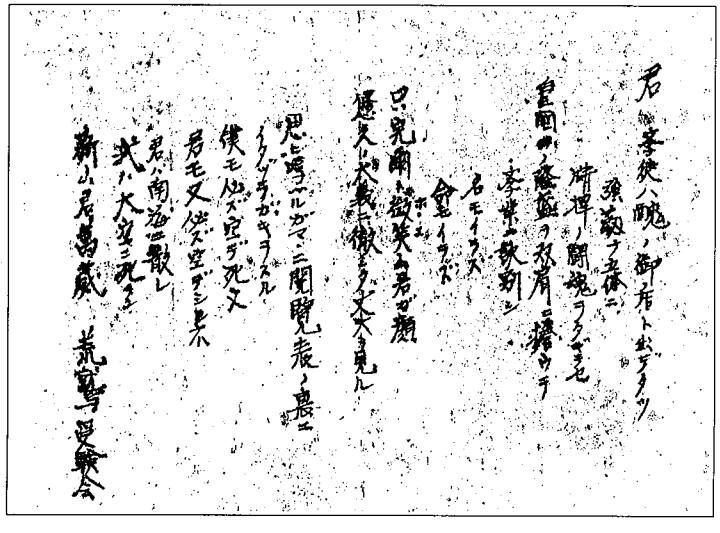
それだけに、この文を書いたA君の心情を理解し難い日がやってくるだろう。この詩は、お国のためという美名に若者が踊らされたのだと簡単に片付けられるかも知れない。

しかし、A君が当時、純粋な気持ちをもって作った詩であることには誤りない。A君の心情は、その頃の若人と共通のものであった。

かつて、芥川賞受賞したY氏が、ある講演で、「文学を志す者は、十字架を背負って歩んでいる。演劇を志す者は、栄光の舞台を目指して進んでいる」と語った言葉が思い出される。

A君が閲覧したこの本は、演劇の脚本に似た内容である。A君は演劇好きだったのかも知れない。それ故に、このような表現で、自分の気持を閲覧表に托し遺したものであろうか。

（岡部忠夫）



小田原叢談(三)

石井富之助

小田原のみかんの名称

小田原のみかんにはおおよそ「相模柑子(こうじ)」「小田原みかん」「相州みかん」「神奈川みかん」の四つの呼び名がある。

柑橘の歴史をひもどいてみると、天平九年(七三七)に相模國余綾郡(よろぎぐん)から朝廷に橘を献上した記録があり、『延喜式』には前川蜜柑朝貢の記事がある。また、『類聚國史』には延暦十一年(七九二)に相模柑子の献上を遠路のことだからという理由で止めていることがしるされている。

すなわち、小田原付近に産出する柑橘は一千何百年前にすでに相模柑子という名で知られていたのである。

つぎが小田原みかんという名称である。常識的にこの名を考えると、柑子にかわって温州みかんが栽培されはじめた江戸時代後期からだろうと思いがちだが、なかなかどうしてこの呼び名も古い。

『徳川実記』という本がある。その「大猷院殿(家光)御実記」巻一の元和九年(一六二三)一月五日のところに

大御台所より民部局消息にて金地院崇傳へ小田原蜜柑一桶を賜う。

という記事がある。

正式に小田原みかんという名称があったのではなく、小田原侯の献上するみかんを便宜上こう呼んだのかも知れないが、ともかく徳川初期にすでに小田原みかんと呼ばれ、珍重されていたことがこれでわかる。

相州みかんという名は、明治四十年五月に神奈川県農工銀行の発行した『相州蜜柑』という本に

本書題して相州蜜柑とせしは本県に於ける産出地の大部分は相州に属し、且つ従来相州蜜柑の通称あるを以てなり。

とある。

明治の末期にはみかんを栽培する者が増加し、産地は前川、国府津、下曽我、片浦をはじめ相模一帯にひろがった。

大和田建樹が例の「汽笛一声」の「鉄道唱歌」を作ったのは明治三十三年(一九〇〇)のことであるが、鉄道沿線の情景は歳月とともに発展し、変ぼうした。

それで明治四十二年に東京、鹿児島間の歌詞をすっかり作りかえ、東海道線、山陽線、九州線の「汽車」三部作を発表した。

その「東海道唱歌汽車」の中では

国府津に名高き蜜柑山
枝に黄金の玉満ちぬ
酒匂小田原打ち過ぎて
熱海に行くはここよりぞ

とうたわれている。大和田建樹の眼には蜜柑山の美しさが特に焼きついていたのであろう。

相州みかんという名称はどうやらこの辺から正式名称となったように思われる。

そこへ行くと神奈川みかんという名称ははっきりしている。昭和三十五年に神奈川県園芸協会、同柑橘農業協同組合連合会の共編で発行した『神奈川のみかん』によると、昭和十一年に相州みかんを神奈川みかんに名称変更したことがちゃんとしるされている。

わたしは小田原の地場産業はすべてみやげ物から商品へ、商品から輸出品へと発展の経路をたどっていると考える。

みかんもはじめはみやげ物であった。『新編相模風土記稿』を見ると、

前川の産を名品とし、其辺の村々最も多し、又石橋、米神、江の浦、土肥宮上の四村の辺にも産す。

とあり、それぞれの地名のところには「土産　蜜柑」としるされているのである。

明治の後半になると柑橘産業の振興のために、農工銀行が資金の貸出しを行い、あわせてその技術、経営指導にも当たっている。

昔は小田原領に産するから小田原みかんでよかった

カット　内田美枝子

かも知れないが、実際は足柄上、下郡の産物である。そんなことから相州蜜柑の名が自然に生まれてきたのであろう。

ところが、栽培技術の研究改良と農家の努力とが実を結んで、ようやく和歌山その他の関西物と肩を並べるほどの商品となった。そこで神奈川みかんと大きく名乗るようになったのであろう。そして、さらに輸出品にまで発展するに至った。

こういう名称の変遷を見たゞけでも、みかん発展の経緯がうかがわれておもしろいのであるが、最近、和歌山みかん、愛媛みかんを廃して、地元の名をつけるべきだという意見が出てきた。栽培技術の進歩と共に、同じ県内でも産地それぞれに特色を持つようになった。それを総称的な名前で一括されてはつまらぬという声が出てきたからである。この例からいくと、また小田原みかんの名が復活するかも知れない。

（続）

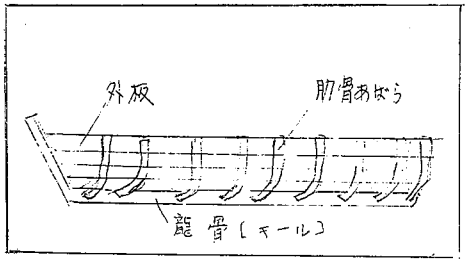
材木屋綺談 その十九

文と絵　たかた・きくせん

最近は木造船の姿を見ることが全くない。釣りの遊漁船でさえプラスチック製である。だが我が国では、明治期に鉄鋼船が出現するまでは、船はすべて木造船であった。さる大戦中も鉄鋼不足で木造船が幅をきかせた。その木造船の木材を扱うのも材木屋である。当地方でも平塚、小田原、真鶴、伊東と木造船業が盛んであった。しかし、造船用木材は建築材と違って、特殊の規格形状が要求されるので普通の建築材を扱う材木屋は造船材は扱わなかったが、私の家では銘木を主要品にしていたので、タマには造船材を扱うこともあった。従って私も多少の知識は持っている。

神様はNO　仏さまはOK
木造船材商売往来

木造船の最重要部分は背骨にあたる龍骨（キール）と肋骨材（あばら）である。龍骨は、船の全重量を支え波力に耐える背骨であるから、船の長さだけの一本通しの松か杉でなければならぬ。普通の山林の木ではそんなに長大なものはない。従って神社か寺院に立つ大木でなければ適材とは言えぬ。しかも曲折のない直幹材でなければならぬから、竜骨材を探すのは県内だけでなく、近隣県の神社寺院を探さねばならない貴重な材料なのである。また、適材が見つかってもその運搬が大へんである。何しろ長さが最長のものでは三十間（約五十四メートル）もあるのだから、トラックでは難しく、トレーラーでなければ運べない。しかし、自動車さえ少なかった時代だったから、荷馬車で前部を支え、後部はその為に造った頑丈な地車に縛りつける。しかもこの長大物では狭い道路は通れないし、幹線道路も昼間は交通が頻繁だから深夜を利用して運搬人夫十数名を使って作業するのであった。



しかしこんなに苦労して運ぶ材料でも実は一つのネックがあった。船主が寺院の木はOKだが神社の木は祟りが恐ろしいから駄目だと言ってその産地を気にするのである。今の私たちから見れば寺も神社も同じに思うのだが、航海の危険を極度に恐れる船主にとって神社の木はタブーなのである。おそらく縄文期以来の我が国の精神風土から来るのだろうが、材木屋にとっては折角苦労して探した材料だからそう簡単にはゆかぬ。やむを得ず神社の木でも寺の木ですと偽るより外手がないのである。知らぬが仏とはまさにこのことである。

「あばら」の方も適材を見つけるのが大へんである。これは文字通り欅の根元のL型材を使う。この形は傾斜に生えるものでなければ見られないものだ。木材は直材がよいとされるに「あばら」材だけは曲りが深いほどよい。従って造船材の専門商はふだんからこの曲り材を集めておくのである。

このように木造船材は、適材を探すのに苦労するにもかかわらず、木造船業者の代金の支拂いは滞りがちである。私も造船の作業現場を屡々見学したが、その作業は至っていわゆる「おっつけ作業」が多い。正確な設計図によらず、現場にぶつかって余る処は切り、足らぬ処は「はぎつけ」をするのを見ていて、私は、このような意識が金銭感覚にも作用しているのかと、余計な推理を働かせたものである。

（続）

震災日記 ③ 片岡永左衛門

大正十二年
九月十一日　晴

静岡県より慰問の梨実四個、味噌少々を配給。

大阪より慰問遣贈の物資着船すべしとて保勝会員、役場員等待ち居りしも来らず。

今朝、親一、龍夫［片岡永左衛門の長男と孫］と徒歩帰京。

十二日　晴

岡田氏に荷物を預けし挨拶と見舞を兼ねて行きしに、谷津道は、避病院［現・市立城山中学校辺］露地崩落路を塞ぐ。大廻りして入谷津に至れば、左右の畑、宅地、道路に落込み塞がりしを辛うじて行きしに、同家も新築の部分半潰、其の余は全倒。中食の馳走を受け帰る。

今夕、桶屋を頼み、一日以来始めて路傍の風呂に入り、身体伸々とす。夜半より波高く涛声聞こゆ。『駅鈴余音』には、「薪を持ち寄り近家を頼み」とある。

十三日　時々降雨

今日、二七日待夜にて家人と佛前に念佛す。今夜より物置に分宿せし者も引き揚げ、尾崎（亮司）と両家上下一同仮宅し就寝する迄となれり

十四日　雨

大蓮寺に墓参す。余震毎日なるも、昨夜はかなりの大震、人々又驚く。一木（喜徳郎）氏より荷物其の他倒壊家屋処分し相談に偶々来りし使の者来る、其の談に依れば、過日の箱根越えも容易ならず。箱根町にて壱疋三島迄四里間拾八円と云うを漸く十五円にて弐疋雇い、八時に沼津発車に乗り、郷里掛川在に。汽車開通迄滞在することとなせりと。

十五日　時々降雨

大蓮寺上人読経に来る。十二時頃、本店（関東銀行）支配人山下知七氏代表し見舞に来る。午后、昨日打ち合せに本店に遣わしたる篠窪帰り、取りあえず月給弐ヵ月分を前借として各行員に渡す。

夕刻より強雨となり、雨漏り甚だしく、裸体となり羽目の透間、屋根の漏る箇所に板を打ち付け、漸々凌ぐ。午後十一時、又々強雨にて漏り始め、一同起き出し畳を揚げなどして一時を凌ぐ。又々二時頃より漏り始め、此の度は格別に非ず。夜明け止む。

本日より役場を経て慰問品の配給を始む。

十六日　晴

役場にて玄米一人弐合宛施し、其の後貧困者に限るとせしに、昨日より米商組合に依託し安売りとなせしが、其の半額は玄米又は外国米とし、白米のみを希む者には売り渡さず。拙宅にては、用心に五日に大蓮寺にて玄米一斗を譲り受け、昨日、岡田より玄米一俵を譲り受け、其の他在米と役場の給米にて事足り、尾崎と共同の食物には不自由せざりし。

今朝、行員沖津、餡餅を持参、震災以来始めにて美味を感じ、午后二度目に取り出し食すれば、下等の砂糖にて製したれば、味は劣り、今朝とは雲泥の相違を感じたるも可笑し。

今日は、清吉両人にて来り、雨の準備も出来安心せり。

十七日

午前、行員一同来宅、事務を打ち合せ、午后田辺氏を見舞。

東京龍夫より横浜高田焼失せしも無事避難し趣き、尤も手紙数日の延着なり。此の十七日間、安事暮したる全く安心せり。午後、栗田繁芳見舞に来る。東京松田氏見舞に立ち寄れり。夕刻より又雨なるも家根も完全したれば、足手も伸ばし只音を聞くのみ。

今日弐回目の入浴を大久保氏庭の露天にてなす。

十八日　晴

午后、岡田氏に診察を受けしも格別の事なしと同家にて入浴し帰宅。震災以来始めて夕食に生魚あり。

川部等の奔走せし救済物資、大阪より三瓶山丸にて運搬し来りしも、風波の為浦賀港に碇舶の処、昨日より着岸。保勝会員、文武館員、役場員、其の他関係者の尽力に依り陸揚げす。此の物資に就ては、種々の申し分あり、初め小田原迄の様なりしに、（「保勝会、役場の意志疎通を欠き止むを不得……」この部分は消してある）後には郡全体となれり。郡は漁夫の利を得たるは、結局理屈のため困ったものなり。

十九日　晴

昨日より桜馬場（小田原市城山）柑園、物置小屋崖下に崩落せしを取り方付けに着手し、今日は人夫、清吉等と共に行いしに道路何れも破潰し、車の通する見込みなし。園の北方の土地は崩落し、風除けに植付けたる松杉は、大なるは三尺辺りも有りしに無残土地と共に崩落し、道路は殆ど完全な所なく、南方御耕地（閑院宮家耕地）寄りは、諸々崩落するも橘樹には格別被害なきも、道路不通の為、成熟するも搬出の手段なく、途方に暮れる。帰途山角町道は如何にと視察せしに、それは殊に甚だしく破潰し断念して帰宅す。

午后、小倉、曽根田等来訪。福浦露木と来る。福浦も可なりの被害にて有名の

龍宮岩も崩落せりと。

関氏来訪し、其の談話によれば、台宿辺は、震災当日は、火災と製氷会社のアンモニア瓦斯の為、非常に困難せりと。

九月十二出の龍夫来状十七日に着く。

昨日は乗物都合よく五時頃宅へ着きました。然しこのところ命懸けです。今朝五時頃宅を出て横浜高田を見舞いました。皆無事です。家は傾いた位ですから焼ける迄に少し荷物は出たそうです。足立方は焼け方がおそかったので大分出たそうです。今は足立さんと一所に石川小学校内に避難して居られます。御伯母様も二人の無事を聞き、愁いて居ました・一木さんの御使いにたのんだ手紙が来ました。

箱根口付近の惨状

廿日　晴午後より雨

銀行仮建築の件にて神保来り凡ての相談(を)なし、親一午后東京より来泊、葬儀等の相談あり。其の談話に、過日当地を出立し国府津に至り、東より自動車の来る(を)待しに程なく来りしも、警戒の兵士、婦人の外は乗せず、一策を構へ、小田原より銀行の金融上の要件にて横浜に急ぎ行くと云い立て免かざれしも、龍夫は承諾せず、そは給仕にて同行の必要有り強請し乗りたりと。然れどもこの兵士の注意により、婦人非常に便利を得たるべし。この自動車陸軍の徴発なれば總て無賃なりしと。

廿一日　晴

親一、涼子と共に帰京し何となく淋しく、夜に入り尾崎と両人散歩せしに、堀端町役場付近は、物売り見世も有り人通り少しあり。その内降雨となり帰宅す。

今日芳子(永左衛門娘亮司妻)と墓参、帰途海岸に至り見れば、早川より真鶴迄の一帯の海岸は崩落し、赤土を露出し旧観なく惨状甚だし。聞く処によれば、聖ケ嶽の山頂崩落し来り、根府川は被害甚だしと。その他に崩落の跡多く見ゆ。

廿二日　午后より雨

静岡県庵原郡在郷軍人聯合会員は、救護に出張し来り、道路の故障物など取り片付けし活動せり。

廿三日　晴

一宮老母病死す。同人は若き時より出入りし居りし者、悔みに行く。

震災以来海岸は、海水引き去り、防波堤より波打ち際の間以前より、七、八間(12・6m～14・4m)も広くなり、防波堤も数箇所破潰し旧観なし。

被害地を一覧したきも昼間気の毒に堪えず、夜に入り青物町・高梨町を見しが、気の毒は通り越し、いやになれり。

廿四日　雨
廿五日　晴

午后、篠久保と会談、帰途岡田氏に立ち寄り新築の相談せり。

廿六日　晴

午前七時篠窪を連れ本店行きのため役場前より自動車に乗る。途中新宿より山王原は幾分軽震なるが如し。酒匂仮橋は一昨日の雨にて落橋し船待ちしたるも不馴れの渡し舟二艘のみなれば渡河の人多く、短時間に通過不可能と見たれば、土手通りより上流の破潰せし鉄道の鉄橋を渡りしに、最近の土手寄りの処は非常に破損し、危険の箇所は戒厳の兵卒警戒し居り、工事の障害なれば、今より以後は通過を免れざると云へり。

初めは、そこより酒匂に出て自動車にて国府津に走るの予定なりしも、歩行の道程をとればわずかに遠きのみなれば、鉄道線路を歩行し鴨の宮も過ぎ国府津に至れば、この地も所々倒壊したり。八時発の汽車に間に合わず、次は十一時なれば自動車の便を借りたり。

前川辺よりは追々被害少なく大磯は余程に軽し。平塚は又強震なり。馬入にて降車す。この処も又強震なりしが如し。馬入も落橋し渡船なりしが、国府津十一時発の汽車が着きしたれば、非常の人員となり、人々先を争ふため[戒厳の]兵卒は、危険を戒むるも、猶先を争い殆んど命がけなり。

三時間を要し漸く渡船し鳥井戸迄徒歩し、三、四分も待ちて汽車は東より来たるも、兵士の制するも聞かず車窓より乗り込むもの多く、却って雑踏を極む。この処も命掛けにて、十二時五十五分に発車す。沿道何れも被害し、藤沢にて下車し、空腹を感じ駅前にて中食にあり付く。

町に入れば被害甚だしく、銀行(関東銀行本店)に至り各々無事を祝し用談を終りたるも、途中時間を要したれば、宿泊する事としたるも、銀行も破潰し宿するを得ず。篠窪は石室方に、拙者は三觜取締方に止宿するとし同行して出ずれば、町の被害は小田原と大差無く、死者も百七十人余りなりと聞く。三觜氏は、土蔵は土を振いたるも住宅は小破なり。足を洗いしに強震あり、家中一同逃げ出したり。小田原にて被害者の仮宅を見れば、自宅は縄からげなるも相当に屋根も出来、他に勝りたるの感有りしも、今夜天井の下にそれを伸し横臥すれば、又感慨なきに非ず。昼の疲労に熟眠す。

(続)

川邊本家物語り (3)

川邊 昂

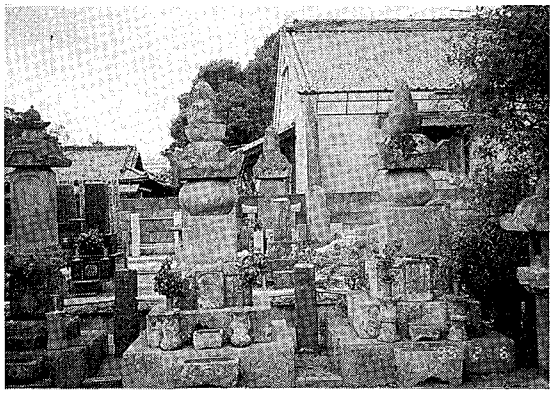
五　川邊家栄光の五十年

(承前)

明治九年（一八七六）明治政府は再び行政区域の整理をおこない足柄県が廃止されて伊豆を除いてすべて神奈川県となり、小田原駅（十字・幸・万年・新玉・緑）の呼び名を廃し、神奈川県第二十一大区一小区小田原となり、小田原区扱所が大久保貫一邸（現在本町）におかれた。

酒匂村に於いては、旧来の村名主による運営が続けられており、川邊段右衛門家明がこれに当っていた。

同年十二月小学校の崇広館第二支校の名称を廃し、訓令に基づいて酒匂学校と称し、第一大学校第二十八中学区第四十六番小学校となり、教員三名の代表は小関正豪であった。



川邊家墓所　右二代目　左三代目

通学区は山王、網一色、酒匂、小八幡の酒匂村である。なお、当時の酒匂村は面積一百八十九町・戸数千三百二十三戸であった。

明治十二年二月第一回神奈川県議会選挙、七月小田原町会議員選挙があったが、酒匂村では未だ村議会を持つまでに至らなかった。

明治十五年（一八八二）二月酒匂橋（木橋）が完成し、それまで仮橋で不便であった山王、酒匂の往来が盛んとなった。この頃、川邊正之助は酒匂小学校の勉学を終り、父家明の手伝いを始めた。

川邊家九代目段右衛門家明は、此の間、営々と農業事業経営に専念し、名主役も勤めてきた。

明治十七年酒匂小学校が浜の台南に校舎を新築したときには大きな貢献をし、九月三日の落成式は郡長関重麿を迎えて盛大に挙行された。

明治二十一年（一八八八）十月一日、国府津・湯本間に始めて馬車鉄道が開通し、川邊家の前通りを馬車鉄道が走った。

明治二十二年二月、憲法が発布され、同年四月一日町村制が施行され、小田原は直ちに町制をしいて初代町長に今井徳左衛門が就任したが、酒匂では法による村制が仲々進まず、明治二十五年にようやく村制をしき初代村長に川瀬市右衛門が就任した。川邊段右衛門家明六十一歳の折であり、酒匂村の元老格となっていた。

明治二十年（一八八七）川邊正之助は二十歳となり嫁をむかえることとし、平塚の豪農小塩家の長女〝さき〟と結婚した。さきの弟は小塩八郎右衛門であり、妹の〝さかえ〟は後に箱根芦之湯の川邊儀三郎に嫁いだ。

川邊正之助には、明治二十一年長女恒子（後に庄司勝に嫁いだ）、明治二十三年長男家祥が生まれた。この家祥が川邊家十一代となる。更に、明治二十五年次男辰二、明治二十六年三男政之助が生まれた。

九代目段右衛門家明は、川邊家がこのように隆盛になったのは代々先祖の労苦によるものであるとして、家明が五十八歳であった明治二十二年から、菩提寺大見寺にある先祖の墓所の大整備に着手し、その一つ一つに墓誌を刻んだ。

先づ、明治二十二年七月一日祖父七代家勝と六代保家の墓を建立し、同年十月父八代家政の墓、明治二十三年には五代貞辰と四代慶貞の墓を建立し、三代貞次と二代家貞の墓を修築、そして明治二十四年初代家次の墓を修築した。これらは、高さをほゞ同じくするために土台を築き一画に整えたのである。

こうする中、家明の母〝恵九は明治二十四年（一八九一）一月二十三日九十歳の長寿の生涯を終え、八代家政の墓所に葬られた。

墓地整備を終えた九代目家明は、明治二十年東海道線国府津駅が開設され、翌年馬車鉄道が通って利用客が多いことに着目し、五代貞辰の植樹した十万株の松苗の中、生長した三千株の松林を利用して貸別荘・旅館・料亭を作り「松涛園」と名づけ、明治二十四年（一八九一）八月十二日に多くの来賓を迎えて開園式を挙行すると共に、祖先の霊をなぐさめるため大本山浄華院霊厳寺三十五世大教主による回向を挙行した。この松涛園は、当時湘南随一の避暑地として中央財界の要人達が利用することになった。

明治二十五年四月九日、小田原市緑町より出火した火事は、折柄の西風によって酒匂村にも飛火し、浜の台南にあった酒匂小学校も校舎全部焼失した。

そこで、児童達は（約二百名）長楽寺・三宝寺を仮校舎に授業をうけたが、浜の

台北に新校舎が新築され、翌明治二十六年七月十一日開校式が行なわれた。また同村山王原にも分校が新築された。時の校長は初代近道常道である。この時も、酒匂村初代村長川瀬市右衛門を援けて九代目段右衛門家明は復興に尽力した。

よく財を蓄え川邊家の隆昌をもたらし、村人のために尽して信望を集めた九代目川邊段右衛門家明は、明治二十七年（一八九四）五月二十日、六十三歳の生涯を終えた。

家明は死に望んで長男正之助に「汝必ず我が意をつぎ、祖先の盛徳陰徳を深くかえりみて、常に身を節し、権門にへつらうことなく、世間の交誼をなくすことがないように」と訓し、更に一族の人々に「兄弟仲よくして必ず川邊本家をもり立てるべし」と遺言した。この時から正之助は川邊正之助家信と名のり、川邊家十代目を相続した。二十七歳であった。妻さき二十八歳、母菊五十六歳であり、家信の長男家祥五歳、長女恒子七歳・次男辰二三歳・三男政之助二歳であった。

明治二十七年、川邊正之助家信は、父家明の遺業を継ぎ農業経営と松涛園経営を始めた。その七月七日九尺に及ぶ家明の墓を建て法要を営んだのである。

また、その七月には日清戦争が始まり、明治政府は、富国強兵政策を打ち出し、米の増産体制を強調し出した。勝利の中に戦争を終えた明治二十九年、学制を再び改正し、酒匂小学校は尋常高等酒匂小学校と改め、高等科を併設した。

正之助家信に、明治二十九年七月八日、四男盛之助が生まれ、明治三十一年二月二十八日、五男武之助、続いて次女多満子（後に五十子巻三に嫁ぐ）、三女八千代（後に星四郎に嫁ぐ）が生まれ五男三女の大家族となった。

明治三十三年（一九〇〇）には馬車鉄道にかわり国府津―湯本間に電車が開通し、松涛園の盛況と共に川邊家には文明開化の波がよせていた。そして、沈滞していた小田原も交通機関の整備によって活気をとり戻し、人口も急速に増加して一万七千人に達した。

話は大分前にもどるが、寛政の末頃（一八〇〇）、加賀の国の住人宮山藤七と云う人が、伊豆山村（静岡県）にきて海岸に定置網を張り立てたところ非常に大漁であった。このことを真鶴村の名主五味台右衛門が聞き網を模造して真鶴に張立ててみたが成功しなかった。その後、海底の深浅や魚道などを研究し、文政七年（一八二四）（川邊邸が焼失後新築した頃）改良した網を真鶴で張立てたところ年々大漁が続き十年余りで大富豪になり真鶴村内も富むようになった。これを〝根拵網〟と呼んだ。

このような多獲漁法の発達は、近隣の村々を非常に刺激し、この漁法の権利をめぐり幾多の紛争があったようだが、結局は藩の許可を得て次々に根拵網の張立てが行なわれ、明治の初めには、真鶴から早川までの地先海岸に、ずらりと根拵網がならんで定置網漁業の基地が出来上っていた。

ところが酒匂村の地先の漁業は、風波が強い関係で地曳網漁業しか存在せず、あまり村のためにはなっていなかった。

川邊正之助家信は、明治三十一年十一月二十七日村人に推されて三代目酒匂村村長に就任した。そして、この根拵網の話に興味をもち、川邊家のためにも酒匂村のためにもなる仕事であると考えて漁業に進出することを決意した。

明治三十二年五月十六日急に村長を辞任して小規模ではあるが先づ地曳網を始めることから着業しようとし、小八幡の本多半右衛門所有の地曳網百十五号漁業の権利を譲り受けて操網の準備にかかり、更に内田文太郎所有の地曳網百十六号漁場を買収して、明治三十四年（一九〇一）地曳網経営を開始したのが、川邊家が漁業家となった第一歩であり、正之助家信の豪快華麗な漁業経営の始まりである。時に、正之助家信三十四歳・妻サキ三十三歳・母菊六十三歳で、長男家祥十二歳・辰二十歳・政之助九歳は、尋常高等酒匂小学校で勉学中であり、盛之助六歳・武之助四歳であった。

（続）

参議院選挙
神奈川県選挙区
平成7年7月24日

当	七一八、〇三〇	松あきら　新進
当	四六六、四五七	石渡清元　自前
当	三七一、八八九	斎藤　頸　社新
次	三三九、四八四	弦念丸呈　無新
	二九九、三七	石川　好　さ新
	二五六、〇一五	畑野君枝　共新
	二五、四九一	小林　正　無新
	二五、九〇一	宮崎まり子　諸新

古文書講座13

油稼ぎ御免・冥加金請書

内田　清

幕府の油政策と早川水車

灯油はごま・荏ごま・菜種・綿実・魚から絞られた。其角の句に「闇の夜も吉原ばかり月夜かな」とあるが、これは魚油の灯火だという。行燈が当地の民家に普及したのは幕末期であろうが、当時の夜は想像以上に暗かったのである。

幕府の油政策は明和三年（一七六六）の御触で大坂市中以外での油絞りと、大坂市場以外での流通を禁止した。江戸を中軸とした油市場に編成がえされるのは天保三年（一八三二）であると言われる（『国史大辞典』）。

とすると明和四年に多田屋直三郎らが早川村での水車利用の綿実油絞りを幕府に公認させ、四年以上ここで営業したことは、関西の技術が初めて関東へ導入されたと言うこと以上に産業史上で注目すべきことである（『御触書天保集成』）。

曽我谷津村兵蔵の詫状

高田の内田喜雄氏所蔵の古文書によると、天明二年（一七八二）兵蔵は、油絞り用菜種買入の容疑で、江戸で裁判を受け、詫書を出した。その後も巡回の油座吉左衛門に発見され、村役人と小田原中宿町の旅籠与次兵衛が、油締め道具の監視を誓約している。この頃小田原藩領内で幕府の政策が貫徹していた訳である。

油稼ぎ冥加金請書

写真は関八州での油絞り御免（免許）と役人巡回を知らせる天明五年（一七八五）の御触書を省略してある。文書の要点は

①関東地方での油稼ぎ免許に伴い大坂屋・丸屋・勝川屋に油と絞粕を送る事。

②油値段は下り油より十樽で一両安とし、倉敷料等は従来どうりと定めた。

③油稼ぎの冥加永の代官所納めを廃止し、改正した冥加金を（前記の商人を通して）上納する。

さらに後略部分で、

④上郡十ヵ村十四名、下郡一宿八村十名の油稼ぎ人ごとに油量・冥加金額（一両か二分）や納入法が書かれている。

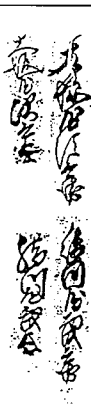
⑤証文の日付は、省略部分に天明五年十二月とある。

⑥証文の差出人と受取人は、省略部分にも無いが冊子の他の部分から考えると油稼ぎ人から幕府普請役（役人）大西栄八郎宛てである。

注意して欲しい語句

A

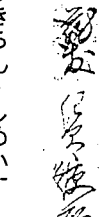
A′



おおさかやじへえ・かつかわやもへえ

虫穴等のため写真版で解読困難の場合、先ず同一文書中で左側の様に同じ語句を探して対比する。また関係資料を広く探すことも必要だ。この文書は『小田原市史』資料編近世Ⅲに掲載されていて、茂は武となっているが、私は字形等から茂とした。

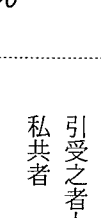
B



くだたりあぶらねだん(ときのそうば)

下りは大坂から江戸への移入の意。直＝ねは値の慣用。場と十の間に加筆文字があるようだが原文書に当ったら虫穴だった。

C

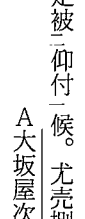


くらしきちん・しめかす・くちぎん

倉庫使用料・しぼり粕→肥料・手数料と見られる。

D冥加永(みょうがえい)**冥加金**(みょうがきん)は、この場合、共に油稼ぎの営業税。前者は銭納、後者は定額の金納。納入先も異なる。

E



さのとおり、おおせわたされそうろう

字余りを改行せず行末部で収めた例である。

差上申一札之夏(事)

①今般関八州(州)村々油稼御免被仰出、江戸表ニ而引受之者人数御定被仰付候。尤売捌方之儀私共者

A大坂屋次兵衛
丸屋　徳三郎
A′勝川屋茂兵衛

右受之者方江油并粕共ニ相送可申候。

②一油直(ね)段之儀ハ下油直段時之相場、十樽ニ付金B壱両安之積を以是迄之通買受、油荷物蔵敷C賃・絞粕・口銀之儀も是迄之積りを以受取可レ申候。前書之者共江被仰渡候。

③一御料村々之内、手作手絞之名目を以油稼致シ、是亦御代官所江相納来候冥加永之儀D、来午年より御免被成下候間、今般御改之割合を以、冥加金D年々上納可レ仕候。依レ之一同上納方左之通E被仰渡候

(以下略)　④　⑤

内田喜雄氏所蔵

会報『小田原史談』ウォッチング

高田　喜久三

反響の多い史談特集号

最近の会報『小田原史談』は、ページ数も多くなり、内容もバラエティーに富み、それぞれに読みごたえのある寄稿が多い。特に一五六号、一五七号の北村透谷特集号は、折から透谷没後百年にあたり、当地に展開された没後百年祭実行委員会の墓前祭に際し、同委員会よりこの特集号百部増刷を要請され、これに応えて墓前祭参加百余名にそれぞれ贈呈された。小田原出身の稀有な文学思想家として名の高い北村透谷の顕彰に、わが『小田原史談』が果たした功績はまことに大きいものであったと思うのである。

又、一五八号の関東大震災特集も西相模地震に関心が高い折りから各方面から『小田原史談』の特集に注目を集め、しかも今年一月十七日阪神大地震の襲来で改めてこの特集の存在を再確認させたのである。私たちの『小田原史談』は、もはや単なる郷土史発掘、広報のメディアである以上に、現代社会認識の資料を提供する使命を持つことにもなったのである。

さらにこのような視点から今回の一六一号の戦後五十年の特集号を読むと、まことに貴重な体験記が多く感銘深いものがあるのでこれから若干述べてみようと思う。

巻頭の富田千春氏の「想いは深し五十年前」は、当時応召して外地に在った私

の識らない郷土の戦争実体を明らかにして大変興味深い。現代の戦争は、戦線銃後も見境いのない凄惨なものであることを骨身にしみて識るのである。星野幸一氏の「遥かなる覇王城」は、今までの多くの戦争実記作品に連なるものだが、体験者の手記は、事実が生々しく読む者に深い感銘を与える。

同じ戦闘体験記でも佐々木勝衛氏の「副官の戦死」はソ連侵入の際の惨烈な敗戦体験で、読後私はとっさに、五味川純平の「人間の條件」のすさまじさを想いおこした。同様に加藤一氏の「トラック島の敗北」は、大本営発表の戦況の裏側を知り、非條理な戦争の実体を改めて胆に銘じた。さらに磯部正人氏の「軍隊体験」ものは、戦後生れの人々には判って貰えないかも知れないが、軍隊生活と言う別世界を描写して人間の愚かな一面をえぐり出している。

私たち戦前、戦中派世代の人間は、成熟いや爛熟した今の時代の中で五十年の体験をふり返りみて、戦争とは何か、人間とは何か、国家とは何か、政治とは何かと、いくつも疑問の前に考えこまざるを得ないのである。今まで学んできた歴史の中からその答えは出る筈なのだが、それほど簡単にはゆかない。私たちは過去の歴史をもっと〳〵深く究めねばならないと痛感するのである。

丹沢の植物 ㉕

城川四郎（きがわしろう）

多少、山野草に興味を持つ人なら、この植物をご存じに違いない。昭和四〇年代に始まる山野草ブームの主要な標的にされたのがこの植物であった。全国のマニアがウチョウランめがけて山奥にわけ入り、採りまくったものである。県内でも丹沢、箱根に分布があったが特に丹沢にはかなり豊富に生育していた。しかし、園芸業者やマニアの乱採取によって、丹沢の渓谷の岩棚を飾ったウチョウランは、ほとんど採りつくされて姿を消した。箱根ではかなり以前から絶滅したと考えられ、丹沢でも絶滅危惧種の一つに挙げられている。

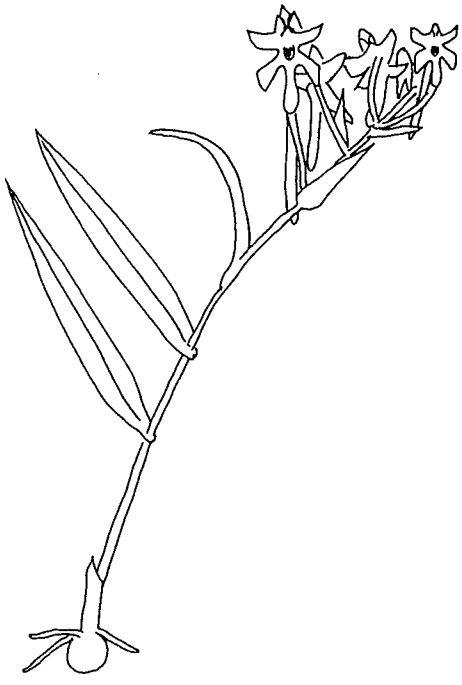
高さ二〇㎝以下で、細い葉をつけ、紅紫色の可憐な花を開く。その可憐さゆえにマニアに狙われるのも哀れである。

昭和三〇年代前半までは、丹沢の渓側の岩上に群れて咲いている情景にしばしば見とれ、標本に一株でも採集することが、自然への冒涜でもあるかのような神妙な気持ちになったものである。図はそうして採集したものを描いたもので三五年前の情景が鮮明に脳裏に浮かぶ。

現在、実施中の丹沢学術調査の植物担当として行動中に、岩の隙間に生育しているウチョウランを観察することができた。危険な場所だから残ることができたのであろう。少数ながら健在ぶりを見て、たいへんうれしく思ったものである。

（続）

ウチョウラン（らん科）
Ponerorchis graminifolia Reichb.f.



筆者原図

盛況だった楽市落座

去る九月九日(土)、十日(日)両日にわたって、小田原城址二の丸に於て開催された「楽市落座」。この催しが始めて開かれたのは、平成二年五月。主催者「小田原評定衆」によると、今回の人出は八万人という。ともかく企画に目新しさがあった。

徳川時代平民的理想(2)

北村透谷

〔承前〕

眼を轉じて巣林子〔近松門左衛門〕に次ぎて起れる戯曲界の相続者を見れば、題目として取るところ平民社會の或一種の要求を充たすものあるを見るべし。之を聞く河原乞食の尤も幼稚なりし時に其趣好は戰國的の勇壯なるローマン〔騎士物語〕風のものにて、例せば盗賊を取りて主人公となし、之れに慈憐〔あわれみめぐみ〕の志を深うせしめ、疆を捍しぎ、弱を助くる義氣に富ましめ、以て戰國に遠からぬ時代の人心に愬へたる如き、概して言へば不自然と過激とはこの時代の演劇に罅く可からざる要素なりしとぞ。後に發達したる戯曲（巣林子以後の）に到りてもこの不自然と過激とは拔くべからざる特性となりて、「菅原手習傳授鑑」に於て、「蝶花形」に於て、八九歳の少童が割腹したり孝死するなどの事、戯曲に特有なるエンサシアズム〔熱狂〕にてもあるまじき程の過激に流れたり。こゝに一言すべきは、平民に特種の思想生じたりとはいへど、思想は時代の兒にてある事勿論なれば、彼等の思想も自から封建的武勇、別して忠孝の大道を武士の影より掬養し〔くみとり養い〕得たりし事を思はざるべからず。故に彼等の中に起りし預言者も、一は彼等の趣味に投じ、一は己れの所見に從ひて、自から忠孝即ち武士の理想をもつて平民に及ぼす事なき能はず〔出来ない〕これ即ち封建制度に普通なる現象にてあるなり。尚ほ言を換へて曰へば封建制度は獨り武士にのみ其精華なるシバルリイ〔騎士道〕を備へたるにあらず、平民も亦た之を模擬せり。然り平民の内にもシバルリイは具はりたり。少なくとも侠勇の理想彼等の中に浸潤して武士の間に降りし雨は平民までをも濕ほしたること疑ふべからざるの事實とす。

かく説き來らば平民社會には「粋」といふものゝ外に強大なる活氣、むしろ平民の侠勇と號するものあることとを知らむ。而して我徳川時代に於ける平民の位地を觀察すること、前陳の如く〔前に述べたように〕なりとせば、彼等は其「粋」をも、其「侠」をも偏固なる〔かたより固まった〕、矮少なる〔ちっぽけな〕、むしろ卑下なる〔いやしめ見下した〕理想となしたることも亦た明らかならむ。

英國のチョーサーは同國に於て始めてシバルリイの光芒を放ちたる詩人なり、然して其吟詠に上りたるシバルリイは武門の内にあるシバルリイにして、平民の内に其筆鋒〔文章による攻撃〕を向けざりし、蓋し〔つまり〕彼の歴史は我歴史にあらず、彼の貴族は我の貴族の如くに平民と離れたるにあらず、彼の平民は我平民の如くに貴族に遠き者にあらず、加ふるに彼には平民と貴族とを繋げる宗教の威靈ありて、教堂に集まる時に貴族平民の區劃を無みしたり。而して我にはこの大勢力あらず、宗教にも自からなる階級ありて印度の古時をうつし出しければ、これも我が平民を貴族より遠ざくるの助けをなせし事明らかなり。彼のシバルリイは朝廷との關係淺からずして、其華奢〔はでやか〕麗澤〔二つの沢が水脈を通じて互いにうるおい合うこと。轉じて友達同志互に助け合い勉学修得をすること〕も自からに王氣〔王たるの雰囲気〕を含みたり。而して平民社會には之に反して政權に抗し、威武に敵する氣稟ある天性のシバルリイを成せり。彼のシバルリイには戀愛の價直高められて、侠は愛と其轍を雙べつゝ自から優美高讃なる趣致を呈せり。我が平民社會に起りしシバルリイは其ゼントルマンシップに於て既に女性を遊戯的玩弄物になし了りたれば、戀愛なるもの甚だ價直なく、女性のレディシップ〔淑女〕をゼントルマンシップの裡面に涵養するかはりに、却つて女性をして男性の爲すところを學ばしめて、一種の女侠なるものを重んずるに至れり。この點に於て我がシバルリイは彼のシバルリイの如く重味あること能はず、我が紳士風は彼の紳士風の如く優美の氣韻〔気品ある趣〕を稟くること能はず、女性の天眞を殺して自らの天眞をも自損せり。彼のシバルリイは「我」を重んじて輕々しく死し輕々しく生きず、我がシバルリイは生命を先づ獻じて然る後にシバルリイを成さんとするものゝ如かりし。己れの品性は磨くこと多からずして、他の儀式禮法多き武門に對敵して反動的に放縱〔気まゝ〕素朴に走りたり。宗教及び道徳は彼のシバルリイに缺くべからざる要素なりしに我が平民のシバルリイは寧ろ當時の道徳組織を斥ぞけ、宗教には縁薄きものにてありし。要するにチョーサーとシバルリイは（即ち英國の）我がシバルリイの如く暗澹たる時代に産れたるにあらず。我がシバルリイのごとく壓抑の反動として兇暴に對する非常的手腕として發したるものにはあらで、燦然たる光輝を放ち英國今日の氣風、英國今日の紳士淑女を彼の如くになしたるも實にこのシバルリイの餘光にてありしことを知るべし。

侠といふ文字英語にては甚だ譯し難かるべし。譯し難き程に我が歴史上の侠は

歐洲諸國のシバルリイとは異なれるところあるなり。倘し強ひてシバルリイを我が平民界の理想に應用せんとせば俠と粹（俠客の戀愛に限りて）とを合せ含ましめざる可からず。俠客の妻を取りて研究せば得るところあらむ。

我が平民界の俠客をうつして文章に録せしもの甚だ多し。われは一々之を參照する能はず。ここに得馬琴が其俠客傳に序して曰ひし數句を擧て其の意見を窺ひ見む。曰く近世乙有二大鳥居逸平、關東小六、幡隨院長兵衛一、皆是閭巷俠、而其所レ爲、或未二必合二於義一、啻立氣齊爲二威福一結二私交一以立二疆於世一者也。較下諸古者道徳之士、不レ動二聲色一、消二宇内之大變一者上、相去非二唯霄壤而已一、然氣豪、以レ此至レ捏二當世之兇暴一、此戰國餘習未レ改、其私義廉潔以有レ然也。使三當時無二此人一、則士風自レ是衰、俠客之儀曷可レ少哉。……余有レ感焉、而無レ所二激憤一、不レ激不レ憤、猶且傳二俠客一。云々。

支那の大歴史家同じく遊俠傳なる一小篇をのこして曰へる事あり。今者遊俠、其行雖レ不レ軌二於正義一、然其言必信、其行必果、已諾必誠、不レ愛二其軀一、赴二士之阨困一、既忘二存亡死生一矣、而不レ矜二其能一、羞レ伐二其徳一、蓋亦有二足レ多者一焉。

韓非子の俠を論ずるの語に曰く。儒以レ文亂レ法、俠以レ武犯レ禁。老子は俠を談じて、大道廢有二仁義一、仁義者道之異稱也、而有二似而非者一。と曰ふに對して、馬琴は夫俠之爲レ言、僵（かたくな）也、持（まもる・ささえる）也、輕生高レ氣排レ難解レ紛。孔子所謂殺レ身成レ仁者是也。と言へり。

われは俠を上下する論を立つるにあらず。天知子（星野天知）及び愛山生（山路愛山）の所論に對して余はむしろ平民界の俠氣に同情を投ぐるの念起りたれば、聊か匆卒の説を爲し我が平民界の「俠」及び「粹」の由つて來るところを穿鑿したるに過ぎず。若し夫れ俠なるものを愛好するやと問はるゝ人あらば我是を愛好するなりと答ふるに躊躇せざるべし。然れども我に俠を重んずるやと問ふ者あらば我は答ふるところを知らず、われは實に徳川時代に平民の理想となりて異色の光彩を放ちしこの「俠」を其時代の平民の爲に憐れむなり。かつて幡隨院長兵衛の劇を見たる時にわれは實に長兵衛の衷情（うそいつわりのない心）を悲しめり。然れども我は長兵衛の爲に悲しむより寧ろ當時の平民の爲に悲しみしなり。彼等平民は自ら重んずる故を知らず、自から俠客なるものをして擅横（勢力を頼み勝手な振る舞いをする）縱暴（乱暴をほしいままにする）の徒とならしめたり。俠客の俠客たる所以甚だ重しとせず、平民界に入りて一種の理想となりたる跡眞に痛むべし。　（了）

島崎藤村編
岩波文庫　初版昭和二年七月発行による。

次の序は、この「徳川時代平民的理想」を引用した藤村編「岩波文書」に載る。

序

六年前、北村透谷二十七回忌を迎へし時に

透谷が亡くなってからもう二十七年にもなる。私が初めて透谷に逢ったのは麹町三番町にあった巖本善治氏の家の應接間で、透谷は二十五歳、私はまだ漸く二十一歳の青年であった。當時透谷は巖本氏の主宰する「女學雜誌」に寄稿しはじめた頃であったが彼が特色の深い論文の最初の試みとも言ふべき「厭世詩家と女性」は早く既にその年頃に出來たものであった。私の透谷を愛する心はそれから三年後、彼が僅かに二十七歳で早く斯の世を去った時まで續いて行ったばかりでなく、その心は彼が死後になってますます深くなって行った。あの友人と私との縁故も深い。彼の絶筆ともいふべき「エマルソン」（民友社出版、十二文豪の内）の評傳は未完成のまゝの原稿を私が引き受けて整理したものであり、彼の遺稿として最初に世に公けにした「透谷集」（分學史雜誌社出版）は私が編んだり校正したりしたものであった。たしかあの最初の集は雜誌「文學界」の同人であり編輯者であった星野君兄弟の手で七百部を印刷し、それきり絶版としたかと思ふ。私があの友人と交ったのは亡くなる前の四年間位に過ぎないが、しかしその短い間が私に取っては何か一生忘れられないものであり、透谷が死んだ後でも書いた反古だの、日記だの、種々書き残した手紙なぞを見る機會があって、長い年月の間にあの友人のことを考へて見ると、掘っても掘っても盡きないやうな種々なものが後から後からと出て來るやうに思はれた。これほど私が透谷のことを忘れないといふのも、一つは自分の年の若く心の柔かな青年時代にあの友人と知合になったからでもあり、一つはあの友人の書き遺したものを纏めて置かうと思ふほど深い縁故のあったからでもあるが、就中私があの友人から感化を受けたことの深かったからであらう。彼こそはまことの天才と呼ばるべき人であったと思う。

新刊紹介

◇開成町史　資料編
古代中世　近世(1)

『開成町誌』は、資料編三巻、通史編一巻、自然・民俗編一巻の計五巻から成るが、このうち自然・民俗編は既に発行されている。今回の資料編は、第一部古代中世、第二部近世(1)に分けられている。

第一部　古代中世

総説と、鎌倉時代から豊臣秀吉の小田原攻略による小田原北条氏滅亡の天正十八年（一五九〇）までの、開成町に直接関係する資料十一点を全文掲載し、さらに読み下しをし、文中難解な用語などは解説の中で補っている。

第二部　近世(1)

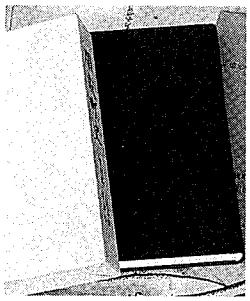
総説と、天正十八年の徳川家康の江戸入府から明治四年（一八七一）の廃藩置県までの開成町を構成する旧八ヵ村に関する資料一三三一点を編年体で、法令、政治、生活、負担、経済、災害の六章で構成、内容の理解と研究を助けるため、資料一点毎に解説をつけて分りやすい内容となっている。末尾には「資料編年目録」があり、利用しやすいようになっている。

付　録

正徳元年大口堤決壊吉田島水害絵図（享保13年作成）

なお、遠隔地で購入希望の方は、開成町庶務課町史編さん係（〒258 神奈川県足柄上郡開成町延沢七七三〒〇四六五―八三―二三三一）に申し込まれるとよい。

A5 三二頁　価 三、〇〇〇円　送料 四五〇円



◇歌集　堤のほとり
穂坂　正夫著

昭和十年より平成六年の自選四百八十九首を収め、末尾の覚書に歌暦と、その思い出を記す。永年この道を歩んできただけに、趣味の域を脱した洗練された内容となっている。なお、著者は、昭和四年から同四十六年まで、小田原市、足柄下郡の小学校に勤め、また、学校長を歴任。昭和六十三年からは「小田原の図書館を考える会」代表として、新しい市立図書館建設への市民運動に励んだ。郷土の歴史をまとめたものに『富水西北の歴史』(一)(二)、『下府中の光芒』がある。

A5 三二頁　価 二、〇〇〇円

なお、この歌集は市内書店にて販売されている。

雑誌紹介

◇時空（じくう）95・7　第6号

発行人　鈴木　一正
発行所　〒234横浜市港南区日野六―一一―一九―四〇四
鈴木一正方「時空の会」
A5 五〇頁　五〇〇円　〒一九〇円

〈小説〉
「体温」　椎名真珠子
〈エッセイ〉
「旅のスランプ」　篠原　敦子
〈論評〉「戦無派の昭和史」―なぜ戦争だったのか（その2）　菊田　均
〈研究資料〉「最近における透谷研究文献目録」(14)　平成6年1月～12月　鈴木　一正

椎名真珠子「体温」は、4号の「イズマイロボの月」の続編。ロシア留学中、事故で死亡した息子の恩師の日本招待の話。ロシア人独特の気質が描かれている。

篠原敦子「旅のスランプ」は、スリランカ滞在記。

菊田均「戦無派の昭和史」は、前号に続き、昭和天皇の戦争責任、政治的人間としての天皇を論じている。

鈴木一正「透谷研究文献目録」(14)は「時空」としての連載は四回目。昨年は透谷没後百年に当り、例年になく数多くの文献を収める。

（発行者の鈴木一正さんは小田原史談会員）

蓮乗寺の浄水

小田原市小台（にだい）の蓮乗寺墓地の傍らにある掘り抜き井戸からは、滾々（こんこん）と清水が湧き出ているが、最近、掘り直したもので（地下約20m）、検査の結果、飲料水としての適合の由。標示板には、明治三十八年（一九〇五）十二月、綾部文助新堀寄進とある。おそらく当初は、墓参りのためのものであったろうが、この地域の掘り抜きが開発された年代が推定されよう。それにしても、松蔭住職の配意には頭がさがる。

お知らせ

連載中の隠岐威重氏遺稿「露国・日露の役浮慮のこと」、石綿勉氏「孝行者藤右衛門尚清」、岡部忠夫氏「紅蓮洞・坂本易徳」は、都合により次号以降に掲載することに致します。

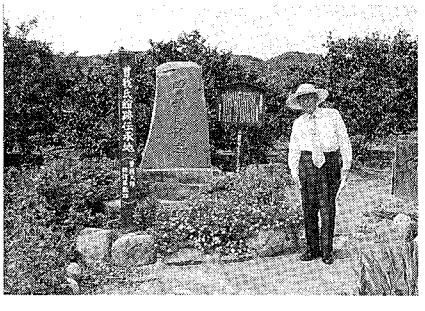
小田原史談会行事

曽我の里史跡めぐり　平成七年五月二十日(土)　一時～四時三十分　下曽我駅前梅の里センター集合

［講師］富田千春［コース］山伏塚－東光院－大運寺－曽我氏館跡－神保家阿弥陀堂－宗我神社－尾崎一雄文学碑－城前寺－雄山荘（解散）［参加者］（順不同敬称略）

山口新平、譲原良二、遠藤定雄、山口広子、中田郁子、角田道・幸子、相原俊夫・佐知子、大河原安、高城敏子、川添よし子、加藤松江、三尋木啓子、小室泰子、形岡タミ子、額田常子、佐宗正雄、内田美枝子、藤沼キク子、瀬戸君代、安藤繁美、奥津尚男・洋子、星野幸一、中嶋澄子、池田テル子、伊藤冨久美、野口秀子、拝戸三英子、松岡邦子、伊与田良太郎、木曽正雄・シゲ子、杉山正善、小林房子、湯川玲子、大場千代子、杉浦恵二、佐々木正孝、市川一郎、富田きみ江、時田満子、杉山久江、小田中正二、山口一夫、近賀喜久男、河本登志、勝俣末子、石川タカ子、柳川辰夫、川久保和男、岩田紀義、阿久津一郎、田島マサエ、石綿勉、本多孝三、力石元吉、高橋佐年、志村久、横沢正美、向山重忠、勝俣綾子、石阪順子、曽我保夫、原正、下川環、西山銓太郎、岡部忠夫　以上七十名

なお、今回の史跡めぐりでは、柳川辰夫、市川一郎両氏の助力がありました。



譲原良二氏撮影

特別賛助会員

智恵袋　相田酒造店
小田原銀座　アオキ画廊
熱海　アオキクリニック
足柄香粧株式会社
飛鳥亜庫
紳士服の　アメリカヤ
㈱　アルファ
画材　ガクブチ　いのうえ
伊勢治書店
伊豆箱根トラベル　小田原営業所
かまぼこ
南足柄関本　おぎの整形外科・歯科
税理士　公認会計士　小澤重治事務所
株式会社　小田原魚市場
小田原ガス
小田原市農業協同組合
小田原報徳自動車
株式会社　オートセンター・スギヤマ
㊞小田原中央青果株式会社
オリオン座
かまぼこ　籠清
金寿苑
鐘紡株式会社小田原工場
カネボウ化粧品鴨宮工場
神尾食品工業株式会社
木地挽　日下部産業株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小伊勢屋
㈲　小松石材店
さがみ信用金庫
趣味のごふく　さくらい
宝飾専門店　Shimano JEWELRY

正榮堂
中華料理　昇玉
杉山水道工業株式会社
鈴廣かまぼこ
石寿堂スポーツ
大営不動産
割烹　おるは
そば　二宮
茶半家具株式会社
ちんぎう本店
土谷建設株式会社
角田ガクブチ店
東京電力㈱小田原営業所
株式会社　東華軒
トーホー建物株式会社
和菓子　菜の花
八小堂書店
八ナマサ
平井書店
富士写真フイルム株式会社小田原工場
株式会社　報徳
栄町　松坂屋
学生専科　㋮マルク
食器の店　マルサンストアー
みつゆき設計
諸星運輸グループ
株式会社　美濃屋吉兵衛商店
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社
山口菓子舗
株式会社　ユアサコーポレーション　小田原製作所
防災器具　優光社

小田原史談（三月発行）
年会費　普通会員三千円
〇〇二〇－三－六四三三六
辰巳